浅野誠

研究雑録

シマおこしなど

２０１３～２０２１年

私のブログ「沖縄南城・人生創造・浅野誠」に掲載した２０１３～２０２１年記事を編集して、さまざまなテーマの冊子をつくってきたが、それらに収録できなかった記事約４０を収録したものである。記事の中で、もっとも多いのが「シマおこし」なので、「シマおこし」というサブタイトルをつけた。

２０２２年3月刊行

目次

※ 配列は、タイトル冒頭に示した記事作成年月日順を基本とする。

2021 年 10 月 03 日 鈴木庸裕『学校福祉論入門』２０２１年学事出版を読む
2019 年 06 月 27 日 サークルや起業などと、集落（シマ）とが豊かな相互還流関係を築く 集落（シマ）おこし１４最終回
2019 年 06 月 21 日 つながりと集落を選択創造する動き 集落（シマ）おこし１３
2019 年 06 月 16 日 つながりの喪失と血縁・地縁関係 集落（シマ）おこし１２
2019 年 06 月 09 日 つながりを失う、切る、捨てる、離れる 集落（シマ）おこし１１
2019 年 06 月 03 日 「必然・宿命」型つながり、「選択・創造」型つながり 集落（シマ）おこし１０
2019 年 05 月 28 日 つながりができる場（続き） 集落（シマ）おこし９
2019 年 05 月 20 日 つながりができる場 集落（シマ）おこし８
2019 年 05 月 13 日 つながり 集落（シマ）おこし７
2019 年 05 月 06 日 シマおこしと住宅 集落（シマ）おこし６
2019 年 04 月 29 日 変化する観光 生き方の転換 集落（シマ）おこし５
2019 年 04 月 21 日 生活 便利さと「ここちよさ」 集落（シマ）おこし４
2019 年 04 月 14 日 雇用 企業誘致 起業 集落（シマ）おこし３
2019 年 04 月 09 日 個人の好みと集落居住 集落（シマ）おこし２
2019 年 04 月 01 日 集落（シマ）おこしと消滅集落 集落（シマ）おこし１
2019 年 03 月 03 日 若いころの私と地域とのつきあい 私の地域研究史１
2019 年 03 月 10 日 沖縄にこだわる 私の地域研究史２
2019 年 03 月 18 日 地域調査の多様なアプローチ 私の地域研究史３
2019 年 03 月 25 日 南城学？ 私の地域研究史４
2018 年 11 月 21 日 SNS スマホ 情報収集と発信３
2018 年 11 月 15 日 情報収集と発信２
2018 年 11 月 09 日 情報収集と発信１ インターネット回線切断をきっかけにして考える
2018 年 03 月 28 日 「地域おこし これからの社会・世界」をＨＰに掲載
2017 年 09 月 01 日 自治体の工夫 冷房など施設の維持管理費 住民の文化資本・人間関係資本を高める
2017 年 06 月 02 日 このごろの私の研究生活
2017 年 05 月 19 日 旅行目的の多様化
2017 年 04 月 09 日 平井威ほか「ブーケを手わたす―知的障害者の恋愛・結婚・子育て」を読む
2016 年 09 月 14 日 沖縄における女性の強さと家父長制
2016 年 09 月 04 日 老前整理の難題 書籍・授業資料・研究資料の整理先
2016 年 08 月 05 日 乱読の楽しみ
2015 年 08 月 04 日 老前整理 「国民教育」バックナンバーの引き取り先を探す
2015 年 05 月 22 日 萩尾俊章「泡盛の文化誌」、新城明久「沖縄の在来家畜」を読む
2015 年 04 月 22 日 喜納育江編著『沖縄ジェンダー学１ 「伝統」へのアプローチ』大月書店２０１４年を読む
2015 年 02 月 13 日 沖縄独自の農業の追求へ 沖縄農業経済学会編「沖縄農業」を読む

2015 年 02 月 16 日　沖縄独自の農業の追求へ　「沖縄農業」本を読む２
2014 年 10 月 10 日　「生活指導研究」№.３１所収の長谷川裕「いじめと子ども・若者の関係性」を読む
2014 年 05 月 27 日　「浅野誠エッセイシリーズ５政治経済社会」をホームページに掲載
2014 年 01 月 19 日　「浅野誠エッセイシリーズ１　フィンランドの教育と仕事」のホームページ掲載
2013 年 12 月 24 日　（続）末本誠「沖縄のシマ社会への社会教育的アプローチ」を読む
2013 年 12 月 22 日　末本誠「沖縄のシマ社会への社会教育的アプローチ」を読む
2013 年 09 月 28 日　模様替えした『生活指導研究』３０号を読む１
2013 年 09 月 13 日　生活指導学会大会　大学における生活指導
2013 年 08 月 14 日　分厚い本を読む

2021年10月03日

鈴木庸裕『学校福祉論入門』２０２１年学事出版を読む

著者から贈呈された最新刊本だ。著者は、このところ毎年１～２冊の編著を出版している。分野は、今回のタイトルにあるような「学校福祉」にかかわるものだ。著者は、現在日本学校スクールソーシャルワーク学会代表理事を務め、長年勤務した福島大学から日本福祉大学に勤務先を変えた。

学校福祉という分野は、１９７０年代以前から取り組まれてきた分野だが、２０００年代に入って本格化し、スクールソーシャルワーカーはいうまでもなく、学校教員・福祉関係職員・行政など多彩な分野の方々の協働で取り組まれている。とくに子どもの格差貧困が重大事だとの認識が広がる中で注目されている。それらの取組みの第一線リーダーとして取り組んでいるのが著者だ。

これまでの編著書は、実践編を中心にしていたが、今回は理論編として書かれている。とはいえ、課題があるところにすぐに出かけ、実践的にだけでなく理論的にも解明している点が著者らしい。私が長年強調してきた「実践的研究者」の典型的存在だ。かれの研究のきっかけの一つは、ソーシャルワーク分野で世界的に先駆的なトロントの実践と理論に触れたことにあると思うが、当時、私はトロントにいた。当時のかれを思い出すと、感慨深い。感慨深いといえば、１９８０年代初め、かれは琉球大学学生で、卒論期には私のゼミに属していた。行動的なかれは、卒論を秋には書き上げたが、それですませず第二卒論も書き上げた。沖縄各地の学校現場を飛び回り、多くのことを得て、それを卒論にしたのだった。

また、東日本大震災の折には、現場をめぐり、学校福祉・子どもに直接かかわって、たくさんの現場報告を全国に発信したことでも知られている。

こうしたかれのことだから、本著を引き継ぐものを次々に提起していくことだろう。大いに期待している。

2019年06月27日

サークルや起業などと、集落（シマ）とが豊かな相互還流関係を築く　集落（シマ）おこし１４　最終回

前回述べた選択創造をめぐる動きは、集落（シマ）そのものがそうであるだけでなく、集落内にある諸組織でもみられる。たとえば、老人会・婦人会（女性会）・青年会・子ども会など、以前なら全員加入制だったものが、今ではそうではなくなっており、なかには組織それ自体が消滅している例も多い。

代わって、任意で結成参加するものが増えている。沖縄で多いのは、歌三線、舞踊、囲碁などのサークルだ。それらは任意参加なのだが、集落公民館を使用し、集落行事で活躍するといった形で、集落を活性化させるうえで大きな役割

を果たしている。そうした類のスポーツサークルも多い。梅雨の時期各地で行われるハーリー大会に出場するチームにもそうした例が増えている。

話は飛ぶが、模合もまた、そうした「選択創造」型の組織となっている。かつては全員参加の必然宿命型であったユイマールさえも選択創造型になってきている。

さらに、集落（シマ）という場で、有志が集って起業することもある。仕事おこしだ。

こうしたサークルや起業などと、集落（シマ）とが豊かな相互還流関係を築けるかどうかが、シマ起こしにとって重要になっている。そうした各種の動きを基盤にして、シマ（集落）起こしを進めるかどうかが、今日重要な局面に入っている。そうした創造的展開がなければ、たとえ人々と家々があるとしても、集落としては「じり貧」から「消滅」への道を歩むことになる。いつまでもかつての必然・宿命的ありように依存しているわけにはいかないのが、今日の時代的特性なのだ。

だから、こうした多様な選択創造の場を、集落が豊かに提供し、そのことで生まれた諸組織のもつ豊かさを集落（シマ）という場に還流できるかどうかに、集落（シマ）おこしがかかっている、といっても過言ではないだろう。

2019 年 06 月 21 日

つながりと集落を選択創造する動き　集落（シマ）おこし１３

現在、田舎にある集落（シマ）の住民をみると、

A.出生から今に至るまで、数十年以上生活している人

B 進学就職をきっかけに、集落外に出て、再び集落に戻ってきた人。　U ターン

C 結婚をきっかけに、配偶者の集落で生活し始めた人

D 集落に血縁地縁がないけれど、その集落に住み始めた人

E 年齢が若く、集落の外に出ることがまだない人

A の場合は、生活習慣として集落生活を継承する人。B は、外に出て地縁関係からいったん離れ、また戻って改めて地縁関係を築き始めた人。BCD は外の生活を経験している人で、改めて何らかの決断をして、現集落に住み始めている。

この決断は、これまで述べてきた「選択創造」ということだ。そういう人が多数を占める時代へと移ってきた。田舎のシマ（集落）でのアパート居住は、選択創造型の特質をもっている。アパート住民がシマ（集落）住民として区費を払うかどうかが話題になるが、過渡期的性格をよく表している。旧来の全員加入型発想からは、支払いを当然の義務とみなすが、アパート住民には選択創造とみなす人が多いのだ。

つまり、今や集落（シマ）も選択創造型の比重を高めるどころか、それが主流になりつつあるということだ。集落つくりのテーマは、集落の「伝統」を継承するというよりも、集落を選択創造するということになってきた。選択創造としての集落つくり、集落おこしが登場しているのが現代である。その選択創造がアパート住民に響き合うものになれば、アパート住民の多くは区費を払うようになるのであろう。

最近では、住居つくり自体を、共同のものとして行う選択創造型が広く見られる。コーポラティブハウスとか、シェ

アハウスなどもそうであろう。都市には、近隣とのつながりを少なくしようとする人が多くいるけれども、その中にあっても、つながりを居住地においても作ろうとする動きが見られる。新興団地における自治会つくりには、そうした多様な動きの絡み合いをみることができよう。

集落（シマ）には、「伝統」が存在することが多いが、現在の住民がそれらのなかで消滅しかかっているものを選択して復活させることもある。行事や芸能を復活させる営みがそれにあたるが、それはかつてのものをすべてそのまま復活するというわけにはいかない。それらの選択・再創造として行われる。

2019 年 06 月 16 日

つながりの喪失と血縁・地縁関係　集落（シマ）おこし１２

血縁をめぐっては、今日では、離婚の増大がつながり構図を変えている点が注目される。それは当人相互のつながりが切れるだけですまず、当人たちとつながる人々の関係の消滅・変化へとつながる。とくに、未成年の子どもがいる場合、影響は大きい。さらに養育する側の親が、新たなパートナーと生活し始める時に、難題が生じる可能性がある。

こうした一連の難題にたいして、しばしば養育する親と子ども自身の個人的対応に限られる。だが、うまくいくことは保証の限りではない。そこで、子どもと養育する親をサポートする多様なネットワークが必要となる。かつては、地縁としてのシマが、こうした難題を抱える当事者たちを包み込むように、対処することがしばしばあった。また、彼らとつながる血縁関係がサポートすることもあった。さらに今日では、地域に配置されている民生委員などがそうした取り組みを推進するキーパースンとなることがある。

同様のことは、地域に住む高齢者で、つながりを失った事例、失いがちな事例として大量に登場し始めてきている。高齢者独居もその例だろう。

転居、離婚、単身高齢者世帯などは、都会なら、大海の雫（しずく）のように感じられ、それまでのつながりが「消え」ても、新たなつながりへのスタートととらえられるかもしれない。つながりをつくるきっかけに恵まれ、その意欲とサポート体制があればいいが、それがない時にどうするか、という問題が拡大してきている。都市の外にあり、地縁的つながりが残っている集落（シマ）にあっても、そんなに簡単なことではない。

そのなかで、こうした課題に取り組む地域自治会などがテレビで取り上げられ、注目されている。こうした問題は、シマや地域自治会が、つながりを豊かに持ち、「福祉」に取り組むうえでの鍵的存在になることが期待されているということでもある。といっても、ハードルが高い課題である。

それは、その地域内に、そうした課題にかかわる「選択・創造」型つながりを作り出すことでもある。また、国や自治体がそれらを支える制度をどれだけどのように構築しているかと深くかかわっている。たとえば、介護制度は、国・自治体の制度であり、運営組織の業務ではあるが、自治会などの地域組織とのつながりをどれだけもっているかが問われることでもある。

2019 年 06 月 09 日

つながりを失う、切る、捨てる、離れる　集落（シマ）おこし１１

つながりの検討には、対照的位置にある「失う」「切る」「捨てる」「離れる」ことも視野に入れて考えたい。

転居に例をとって考えてみよう。転居は、それまでの居住地でできたつながりが、ある程度「失なわれる」「切れる」「捨てる」「離れる」結果を生む。それを意図して転居する例さえあろう。家業の倒産で「夜逃げ」のように転居するのは、その典型だろう。

そこまでではないにしても、それまでのつながりが過剰依存をつくっている、あるいはつながりが拘束になっていると考え、つながりから抜け出るための転居がある。若者が、家族から独立してアパート暮らしを始める場合には、その要素を感じることが多い。区長就任を避けるための転居があるという話を聞くこともある。

近年では、地元から離れたところへの通学通勤のなかで、地元つながりがもともと少なくなっているため、つながりを「失う」といったことに関心がもたれないかもしれない。

それにしても、移動が激しい今日、移動するために、つながりがつくりにくい、あるいはできたつながりが移動で「切れる」ことがありふれたものになっている。それだけに、転居してもそれほどのつながりを作ろうとしない人が多いのかもしれない。隣近所との付き合いが少ない都市型生活が、そうした事態を作り出しているともいえよう。そうした「都市型生活」に慣れた人が、田舎の集落に住み始めて、地縁関係を煩わしく感じる人は多い。

かつて集落は生活面だけでなく生産面でも、住民たちが共有する部分が大きかったので、つながりは「必然・宿命」のものだったが、生産と生活が切り離されている今日にあっては、田舎の集落においてさえ、「都市型」生活になり、つながりも「選択・創造」型となり、同じ集落内に住んでいるとしても、ただ近所に家があるというだけで、つながりが限りなくゼロに近い人が出現している。

そうした地縁的つながりの減少の中で、それに代わる学校や職場などが、地元つながりを作り出すのか、つながりを失うことを促進するのか、その点の検討が必要だろう。なかには、学校つながり職場つながりにも煩わしさを感じる人も多くなっているようだ。そうした人の中には、血縁地縁つながりに懐かしさを感じる人がいるかもしれない。そこに、U ターンの理由がある人がいるかもしれない。

2019 年 06 月 03 日

「必然・宿命」型つながり、「選択・創造」型つながり　集落（シマ）おこし１０

つながりには、出生に伴ってでき、死ぬまで続くような、いわば「必然・宿命」型から、多様なつながりを自分なりに選び創る「選択・創造」型までの間に、多彩なものが虹色のように並ぶ。

「必然・宿命」型 ←――――――――――――――→ 「選択・創造」型

時代の流れの中で、徐々に、左側から右方向へと移ってきている。それを言い換えると、「運命に縛られる」よりも「運命を創る」時代への移行なのだ。そのため、つながりを作る経験と力量が問われる。

そうしたものが育っていないと、孤立に陥る。あるいは商品購入のように、つながりを「購入」することが広がる。典型的には、バーチャルなつながりだ。商品を買う時も、店員との会話なしに、機械処理する。あるいは通信販売に依

存する。皮肉なことに、「便利さ」追求が人間のつながりを減らしていく。あるいは、マニュアル依存がすすむ。そのなかで、つながりを作るのは面倒なことだと感じる人が増えているのかもしれない。

これらは、人生のなかで、最大のつながりつくりの一つである結婚についても言えることだろう。以前なら親決め婚とか見合いとか、かなり「宿命」型要素のものが多かったが、今では、右側にかなり近づきつつある。それは、結婚する二人の選択創造型のつながりが中心になる。二人のつながりや共同生活自体が、右側に近づき、選択創造の比重が相当に高める。

と同時に、二人のつながりだけでなく、お互いの親族や友達、さらには近隣とのつながりを新たにつくることになる点にも注目したい。それは新たな豊かさを生み出す。ところが、そのことをかなり「面倒」に感じる人もいるだろう。

数十年前までは、集落（シマ）に育ったもの同士の結婚がかなりの比率を占めた。それは血縁地縁関係そのものであり、結婚自体が地縁血縁のありようの一環であった。それ以前からもあったが、１９７０年代から一般化するシマ外との結婚、沖縄外との結婚が、新しい様相を作り出す。それは結婚の変容であると共に、シマの変容と並行する。

地縁血縁は、左側に近いものとはいえようが、右側の「選択創造」の基盤・機会を生み出していく。歴史的に言われてきた地縁血縁は、受け入れるしかない「必然・運命」的なものというものではなくなってきている。新たな血縁関係を創造するきっかけになるとさえいえよう。こうして地縁血縁そのものの変容が進行し、選択創造としての地縁血縁が広がり始める。都市生活では、とくに新興団地などでは、それがかなり浸透してきているが、集落（シマ）生活にあっても同様だ。

2019 年 05 月 28 日

つながりができる場（続き）　集落（シマ）おこし９

前回書いたつながりができる場は、他にもたくさんある。そのなかでも、今後、その比重がこれまで以上に高まりそうものを見ていこう。

まず医療や福祉関連がある。今や、高齢者入居施設・病院・作業所・デイサービスなど数えきれないほどの諸施設や諸サービスが、日常生活の中で出会うことが普通になってきた。午前９時頃に散策すると送迎車に出会うことが普通だ。高齢者のなかには、一定期間、自宅を離れてそこで暮らす人は、よくあることだ。また、子ども時代にも、保育所・学童クラブなど、「福祉」でくくられている場で過ごす時間が増えている。障がいをもつ大人にも、作業所をはじめ、そうした場が多い。

だから、そうしたところで知り合いになり、つながりが生まれることが激増している。それは、当事者だけでなく、介護者保護者にとっても、同様の立場にある他の人とつながることが多くなる。また、そうした場で働く人にとっても、つながりを広げていく場になる。同じ保育園に通う親同士が、つながりを作るのはその典型例だ。

それらは、血縁地縁といったものからは無関係であるが、血縁地縁がきっかけとして含まれていることも多い。それらが近隣に所在しているから、つながりができやすいということもある。

観光も、人々のつながりの場・きっかけとしてとらえることができる。民泊で泊まった高校生とつながりが出来て、

数年後に結婚する例が話題になることもある。自動車事故を起こした外国人旅行者を助けたことがきっかけでつながりができる例も聞く。

こんな偶然のつながりがきっかけとなり、リピーターとなる旅行者もいる。なかには移住してくる例もある。

Ｕターンしてきた人が、新たな人を連れてくる例は、日常的に見かける。多いのは、婚姻がきっかけで移住してくる人だ。私が住む近辺でも、４０年前から事例がある。当時は珍しがられただろうが、今では、「普通のよくある話」になってきている。

また、任意参加の各種の会合・講演会・シンポジウム・ワークショップ・展示会などで出会ったことがきっかけでつながる人も多い。趣味や考えを共有していることをきっかけにする例はよく聞く。それをきっかけに同好サークルを作り仲間を広げる例はよく聞く。

各集落（シマ）で、こうしたものはどうなっているだろうか。シマ組織と無関係の場合もあれば、公民館使用など、シマがサポートすることで、シマ活性化につなげている所もある。

2019 年 05 月 20 日

つながりができる場　集落（シマ）おこし８

前回記事に書いたつながりができる場にはいろいろある。

まず学校つながり。現代では、これはほとんどの人が持つもので、日常生活のあちこちに見られる。同年齢で、たまたまクラス編成で一緒になった偶然のものだが、長く続く例が多い。交差点などに目立つ横断幕には、同窓会同級生会のものが多い。これは地元つながりの中心をなすだろう。

同級生結婚の例もあるし、同級生の兄弟姉妹と結婚する例も珍しくない。そのつながりで起業したりもする。部活が同じだというつながりは、さらに緊密なつながりを生みやすい。

つながりをつくるにはきっかけとか場が必要だが、成人後も、それを提供しやすいのが同窓会同級会の集まりなのだ。４０代５０代になっても、続くつながり、あるいは会合をきっかけにして新たにつくられるものが多い。６０代７０代でも多い。

これらは学校に限らず、学童クラブや地域少年スポーツ・お稽古事でも、つながりは生まれやすい。

職場つながりも大きい。大人になってからつくるつながりなので、関係も築きやすい。職場が地元密着型であれば、職場つながりを介した地元つながりも生まれやすい。

最近、農と農産物加工と販売とが結びついた仕事を第６次産業というが、こういうつながりも大きいし、地元密着型になり、農村におけるシマおこしにとって重要な位置を占める。

商工会などの地域組織を通してのつながりもシマおこしにとって、大きな位置を占める。

また、青年会、女性会（婦人会）、老人会など各種の地域組織は、これまでもそうだったが、今後もつながりつくりに新たな役割を果たしそうだ。

それらは、その地域の有資格者全員が加入するものとされてきたが、それが徐々に緩み、なかには解散にいたるもの

もある。逆に、地域的な「しばり」を弱め、任意参加による新たな再生も生まれてきている。

また、地域には、歌三線・踊などの芸能サークル、地域の道に花を咲かすボランティア組織、地域のスポーツ組織など、多様なサークルが広がっている。カルチャーセンターなどの教室が、サークルへと変わっていくものも多い。活発なシマ（自治会・公民館）などを見ると、そうしたサークルがいくつも活躍している例が目立つ。

そうしたサークル的な集まりには、模合が結びついている例が多いことも注目される。

2019 年 05 月 13 日

つながり　集落（シマ）おこし７

前回記事で述べた市街地についてだが、商店街などでの消費活動、工場などでの生産活動といったものの集積で考えることが長く続いてきた。だが、市街地郊外での大規模小売店の普及、煙突や大規模機械などの工場イメージのものの縮小のなかで、市街地イメージが転換し、新たな地域おこしのイメージの模索が広がってきている。

その中で、「人のつながり」でイメージする市街地つくりが広がり始めた。それは田舎に立地するシマつくりにあっても、同じことだ。

１００年以上前のシマは、自分の選択ではなく、生まれた場所が育つ場所であり、働く場所であり、人々のつながりも、自分の選択ではなく、「宿命」として、「自然と」定められた人との付き合いである。それらは「同質」の人たちとの付き合いであり、死ぬまで続くものであり、さらには後の世代まで続くものと考えられていた。相互間は、いわばツーカーのつながりがあり、他シマ（シマ外）の人には理解できないような世界を含んでいる。

しかし、移動の自由、職業の自由などが広がり、市場経済が生活の隅々にまで浸透する中で、事情が大変化していく。進学・就職・婚姻でシマから出る人が増える。勤務先がシマ外にあり、シマには夜間・休日しかいない人も増える。

代わって、シマ外から移ってくる人も広がっていく。婚姻がシマ内同士で行なわれる事例が激減し、シマを超えて結婚するのが通常になる。最初のうちは婚姻によって、女性側がシマに移ってくる例が多いが、そのうち夫婦ともにシマ外に生活する例も広がっていく。

また、シマ内に建てられたアパート・マンションに住む人の中で、シマとのつながりがない人が増えていく。

中には、米軍基地建設のため、シマごと移住する例だけでなく、出身地を追い出された人同士が、出身シマを超えて、新たなシマをつくる例もでてくる。さらに、団地建設に伴って、つながりが薄い人同士で新たな集落を構成する例も出てくる。そこで、団地自治会を結成する例も、結成の動きはあるが、上手くいかない例なども出てくる。

こうして、出身地がシマ内外にわたる多様な人と共に生活するありようが普通になる。そしてそれらの多様な人から選び取って人間関係をつくることが普通になる。血縁とか地縁ではない選択としての人間関係である。それにしても、選択したものが沢山なのか少ないのか、という違いが出てくる。都市でしばしば見られる、隣とのつきあいがない状態もあるし、たまたま近所になったけど、近所になったことをきっかけにしてつながりを築き膨らませていくこともある。その関係の築き方が、シマの豊かさを生み出すことになる。つながりが薄いままで、豊かになれない「寂しい」シマも出てくる。

沖縄は「つながり」の豊かさがあるといわれ、初対面の人ともつながりを生み出していく特性があるといわれる一方

で、そうでもないこともある。

ユイマールにしても同じだ。ユイマールも、血縁があるから地縁があるからといって、習慣的に自然に生まれるとは限らない。意識的につながりを作り、ユイマール関係を生み出す営みが求められる。その「つながり」やユイマールは、シマとシマとの境界を無視する。境界はたんなる行政上地理上の境界に過ぎない。

ただいえることは、そうしたつながりやユイマールを生み出し促進する体質が濃いシマと薄いシマとがある。ということで、どういう取り組みがそれらを促進しやすいか、について次回述べよう。

2019 年 05 月 06 日

シマおこしと住宅　集落（シマ）おこし６

今回は、少し角度を変えて住宅とシマおこしについて考えてみたい。

沖縄でも、那覇・浦添などの都市の近郊地域で、人口増が起っている。典型的には、中城村や南風原町だろうが、私が住む南城市でもそうだ。その人口増の多くは、都市地域からの転入だろう。一戸建て建築もあろうが、アパート・マンションが中心のようだ。購入もあるが、賃貸が多い。

そうしたところに住む人たちには、若い親子が多そうだ。保育園・学童保育クラブ・小学校での子ども数増加となって表れる。

急激な事態なので、住宅などの需要増加に対応する供給という短期の視点で考えられやすい。しかし、長期的にはどうなのだろうか。住みやすそうだ、ということで転入してきた人たちが長く住むことになれば、シマおこしの重要な成果ともなっていくだろう。

そうでなく、短期居住になって、数年後に転出するとなれば、一時的滞在で、シマおこしとしての成果は半分に留まってしまう。

賃貸アパート・マンションから一軒家ないしは購入マンションへの移動であれば、しかも同一市町村内シマ内であれば、シマおこしとしての成果は高い

賃貸でも、将来の長期滞在・居住への足掛かりになると、プラス思考でとらえたいものだ。観光でいうと、広がる民泊が、一時居住への足掛かりになると、とらえたい。そして、将来的には、長期居住となるように期待したい。

もう一つ、市町村内に住みながらも、成人し家族をもつようになって、実家での親との同居から離れ、近くのアパート・マンションに一時的に住む例も意外に多い。

その際、親族ネットワークとか、シマの人とのつながりのネットワークとかが意味をもつ。冠婚葬祭なども、団地内よりも出身シマを中心にすることが多い。南城市内の市営団地には、そうした例が多い。県営団地となると、そこまでにはならないかもしれない。

ところで、市街地というと、商店街を中心にするイメージがあろうが、郊外大型スーパー時代の今では、そうとも限らない。人のつながり・ネットワークから市街地を検討する必要があるかもしれない。その際、とくに福祉的側面からの検討が求められよう。子どもたちや高齢者を含む人々がつながる場としての市街地構想があってもよいのではなかろうか。

また、賃貸アパート・マンションは、空き家になる可能性を多分にもっている。そうしたらどうするのか、という見通しを立てることが求められよう。市街地空洞化の新しい形にならないように考えていきたい。

2019 年 04 月 29 日

変化する観光　生き方の転換　集落（シマ）おこし５

前回述べた「ここちよさ」や文化などを重視する動きは、観光にもあらわれてくる。金銭消費よりも、滞在・体験を重視する観光だ。産業上の収入という視点で観光を見るよりも、自らが生活するという視点で観光を見るのだ。かつて、裕福な都市民が別荘を持つ場として、森・海辺などがとらえられてきたが、今では、新たな生活の場として「田舎」がとらえられ、そこは、生活感、文化・自然との共生感のあるものとしてとらえられ、その視点からのシマおこしを進める動きが広がっている。

それは、観光客と住民との交流協同でもある。場合によっては一体化といえるかもしれない。その例として、まず祭・行事・イベントがある。それは住民参加であり、観光者参加でもある。趣味・スポーツなどには、訪問者に場を貸すというのではなく、訪問者と住民とが一緒になって活動するイベントが多い。　クラフトつくりなどにもそうした例がある。農業体験とか援農などにもみられる。そうした訪問者と住民とが語り合い楽しみ合う、カフェなどのユンタク場も重要になってくる。

こうした変化には、生き方の転換が結びついている。右上がり経済の時代には、商品金銭中心というか、商品金銭への過剰依存が見られたが、そこから離れて、商品金銭とは適度につきあう方向へと移ってきている。若者が、会社選びの際、給与よりも福利面を重視するのもその例だろう。また、都会に出ることよりも、地元志向へのシフトもそうだろう。

若者の中には、競争志向・立身出世主義とは距離を取るものが増えているのも関係があろう。中高年齢者で私が住む南城のような「田舎」に観光滞在しようとする人には、そういう人が多い。というか、定職をやめ、「ゆとり」豊かな新たな暮らしを探るのだ。私のような早期退職者もいる。

システムにがんじがらめになりやすい現代社会では、システムに乗るのを前提しないとやっていけない人が多いが、システムに情熱をもって乗るのはなく、冷めた心でつきあうのだ。古くなった言葉で言うと、「会社人間」化しないということだろう。そこで、手作りの生活と人々との付き合いを豊かな自然のなかですすめていくのだ。

2019 年 04 月 21 日

生活　便利さと「ここちよさ」　集落（シマ）おこし４

集落おこしにとって、生産・雇用と並んで、もう一つ決定的に重要なのは生活だ。生活にとっては、まず便利さが頭

に浮かぶ。電気・水道・下水道・インターネットなどのインフラの整備、買い物のしやすさ、交通上の便利さなどだ。それらへの支払いにかかる費用も重要だろう。こうしたことは、1960 年代から 1 970 年代にかけて特に注目されてきた。現在の 60～80 歳代が、定住地にする集落を決める際に注目したところだ。その後、こうした便利さは、当然のこととして居住地選びの前提条件になる。加えて、子育て環境や自然環境の良さが条件に加わってくる。

近年では、単に便利さにとどまらず、場合によっては便利さを多少犠牲にして、「ここちよさ」を重視する動きがでてきた。たとえば、通勤時間は多少かかるが、生活環境自然環境の良さの方を重視するのだ。それは人々や自然とのつながりが豊かにあり、のびやかに暮らせることを大切にする。1990 年代から始まった田舎暮らしへの流れは、それを反映している。古民家ブームもその一つだ。

また、都市の方が高収入を得やすく、田舎の方が多少収入減になるだろうが、家庭菜園程度の「自給自足」の要素も含み、生活費が割安になると考える人もいる。

また、高齢者・障がい者・病者・子どものための福祉の施設やサービスの充実度を重視して、居住地を選ぶ傾向も高まっている。

こうした福利・生活のしやすさ、そして心と身体のすこやかさを促進する場を求める傾向が高まり、１９７０年代までの都市一辺倒の選択ではないありようが広がっている。

それらには、文化の追求が並行している。文化にも、1960 年代ごろには、「近代的・合理的」で便利な生活と結びついた文化が重視されたが、今では、自然・人間とのゆとりある結びつきとしての文化である。と同時に、消費する文化というよりも、自らが作ることに参加できる、つまり創造する文化に注目する人が増えてきている。

2019 年 04 月 14 日

雇用　企業誘致　起業　集落（シマ）おこし３

集落（シマ）おこしにとって、生産がどうあるかは大きい。かつては、ほとんどの集落が農業という「自営業」が中心だった。自営業ではあるが、集落（シマ）の共同作業の要素がかなり存在していた。

ところが、１９６０年代を境にして、集落外への勤務という形が中心になってきた。無論、集落内に勤務先を持つ例はあるが、少なかった。そのために、集落がベッドタウンとなる傾向が強まっていく。場合によっては、勤務先に近い集落に移住する例も増えてくる。こうして、集落（シマ）は、それ以前のように生産の単位であることをやめていく。

そこで、集落おこしにとって、手っ取り早いのは、企業誘致であるという発想が広がった。とくに地元の雇用増を期待しての人材集約型企業の誘致が追求されてきた。企業側からいうと、人材確保がしやすい地域・集落が期待される。その際、集落が企業に頭があがらなくなる例も出てくる。企業城下町とまでいかなくても、それに似た例もでてくる。また、一定規模以上の企業を誘致することは、その企業の持続が前提となるが、さまざまな事情で、雇用を激減する例もでてくる。

だが、企業誘致が高い効果を示す時期は長続きせず、企業誘致が絶対有効手段とはいえなくなっていく。それは、右上がり経済が終わりを告げることと並行している。

右上がり経済が終わった今、企業誘致による集落おこしは難しくなっている。沖縄では、観光やコールセンターなど

で追求されているが、それらは、都市地区や埋め立て地など企業向けの特別立地の場に限られている。もし、集落（シマ）で雇用機会を広げる企業を求めるとすれば、地元の経済循環の一環として活動する小規模な起業の方がふさわしいだろう。

そうしたものとしては、6 次産業と呼ばれるような、農業・加工食品・販売を結合したもの、あるいは民泊・ペンション・雑貨販売といったものがある。あるいはインターネットを活用した自営業的なものもある。また、クラフト系のものが最近では多く見られる。

2019 年 04 月 09 日

個人の好みと集落居住　集落（シマ）おこし２

前回述べた、集落おこしと集落消滅について、個人の側の視点から述べていこう。

職業選択・居住地の自由を前提とする社会にあっては、どの地・どの集落に住むかどうかは、個人側の選択が大きな比重を占める。その選択基準には、次のようなものがある。

１）馴染み　出生・生育をどこでしたかどうか。地縁でのつながりの厚さ・薄さがかかわる。さらに、親を含む血縁の人とのつながりも、関係することが多い。

２）経済条件　個人ないしは世帯の所得を得る場が集落内にあるか、ないとしても、近隣地にあるかどうか。経済的にみて、自らの生活にふさわしい程度であるかどうか。

３）持ち家にしろ貸家にしろ、住宅を得ることが可能か。その費用の大小。

４）便利さ　買い物　交通　インターネット環境

５）快適さ　空気　景観　近隣の人々とのつながり　地域行事　安全　防災

６）子育て環境　保育所・学校

これらの諸条件をもとに、最終的には個人の好みも含めて、住居地が決められる。

こうした個人による選択が占める比率が高まっていき、それによって、集落（シマ）の人口がきまり、集落の成立があれば、消滅もある時代となってきた。生産と生活という社会的経済的条件と同様に、個人の好みが大きな選択要素になってきたのだ。

そこで、集落（シマ）おこしの成否は、生活生産（雇用）条件だけでなく、個人の好みに応える魅力をどれだけ持てるかどうかにもかかってくる。

生産にしろ生活にしろ継続を前提とする旧来のコミュニティでは、これらに対応することは難しい。そこで、多様なアソシエーション（会社も　個人の趣味を追求するサークルなども）が併存・重層するコミュニティへと変化することが求められる。

そして、コミュニティ内の多様なアソシエーションは、任意参加を基本とする。さらに、コミュニティ自体も、好みによって参加不参加を選べる任意参加型の色彩を強めなくてはならなくなっている。

2019年04月01日

集落（シマ）おこしと消滅集落　集落（シマ）おこし１

新しい連載で、数回ぐらいになりそうだ。

集落を考える際、集落の存亡危機状況を打開しようとする集落おこしに関心が集まってきたのは、比較的新しいことだ。「消滅集落」という言葉がそれを示唆している。ここでいう集落を沖縄では、シマといってきた。

集落の「古い」ありようを「封建的旧習」ととらえ、その改革を図る動き、あるいは集落のしばりから自由になるために、旧集落に見切りをつけ、出ていく人が増えた時期がある。沖縄でいうと、戦後２０～３０年たったころだ。しかし、近年では、対照的に集落崩壊の方が話題の前面に出てきた。

この変化について考えていこう。

かつては、生まれ育った集落（シマ）に死ぬまで住み続けるのが一般的だった。だから、集落（シマ）は運命共同体といってよいコミュニティだった。その背景には、統治者にとって、住民支配と租税徴収の単位として、集落（シマ）が不可欠の存在だったことがある。集落の中に租税納付不足が生じたときには、集落自身で補うことを求めた。だから、住民が集落から出ることを原則的に禁じていた。さらに、沖縄では農地は基本的には個人所有でなくて、共同所有であった。

沖縄は、明治中頃まではその体制であり、首里王府が閉じた後も、明治政府によって、しばらくはその体制が引き継がれていた。

住民自身側から見ると、集落（シマ）は、長年の地縁血縁関係が継続している所であった。農業中心の集落にあっては、農業生産の共同推進単位である。生産環境の整備維持は、集落の共同作業が基本だ。生活面では、相互扶助の単位である。たとえば茅葺屋根の葺き替えは、集落（シマ）ないしは、その下部組織の共同作業というユイマールによって進められた。

そんな集落（シマ）だったが、沖縄でいうと、２０世紀に入る頃には、土地が個人所有化され、居住地・職業の移動が可能になる。明治末から離農して集落から出ていく人が広がっていくなかで、集落（シマ）に住み続ける人もいれば外に出る人もいるようになっていく。工場労働への従事などで離農し、都市に出る人も増える。沖縄の場合、海外移民、出稼ぎの形が多かった。

沖縄外でも、１９５０年代後半以降、離農し、都市就職する人が激増し、集落から離れていく。若者の場合、それがごく普通のこととなり、集落にそのまま残ることの方が例外的なものとなる。

そして、１９５０年代末からの高度経済成長期以降の右上がり経済の展開は、田舎といわれる地域を含めて、津々浦々の集落を、金銭や商品を軸にした生産と生活へと変貌させていく。多くの集落で、人々は農業中心の生産ではなく、勤め人として外に出かけ、そこで賃金を得て生活を支えるようになっていく。地方にある農業を中心にする集落においては、離農者が増えたというだけでなく、若者人口の流出、さらには人口全体の減少状態を生み出していく。それは、住民の人口構成における高齢化を作り出す。そうした集落は、当時は「過疎」という言葉で表現されたが、今では「消滅」という言葉に置き換わっている。

2019 年 03 月 03 日

若いころの私と地域とのつきあい　私の地域研究史１

４年前から南城市史「民俗」編の調査委員になり、南城の人々の暮らし（民俗）や歴史を調べる活動をしている。それ以前にも１０年余り、南城市文化センターシュガーホールの運営審議会、さらに南城市観光振興審議会をはじめとする観光文化行政の委員会など南城市行政にかかわってきた。

これらは私のもともとの専門分野である教育関連ではない。こうして１０年以上にわたり南城市という一つの地域にかかわる専門外分野の仕事をしていると、なぜかかわっているのか、不思議に思われることがある。
いずれも依頼を受けて引き受けたのであって、私から立候補したわけではない。でも、引き受けてもよいなと思ったことは確かだ。そこで改めて私が特定地域にかかわってきた自分史を専門分野であるなしを問わずに書き連ねてみようと思う。そして、私なりのかかわり方の特徴についても考えてみたい。

まず意図的にかかわったのではなく、生まれたという運命にもとづいて生育した地域のことである。出生から小学生時代までの１２年間生まれ育った所は、現在は岐阜市に合併されているが、当時は人口数千の農村であった。集落以外は、見渡す限り水田だった。しかし、繊維産業が栄えるにつれて、地域が激変していく。繊維景気から高度経済成長に移るころ、建設の進む名古屋へと土砂を輸送するトラックが、一日数千台もいきかうところとなった。

小学生時代は、近所の子ども達誰もが思うように、家業をつぐものだと思い込んでいたが、高度経済成長に入るなかで、事態は変わった。高校大学進学・都会就職という流れへと大きく切り替わった。私も、名古屋の中学高校に通学し、大学は東京に行くことになった。中学高校大学時代は、居住地域とのかかわりは、祭り・行事などに限られ、ゼロに近かった。

「地域」というものに出会うのは、大学３年生の時、学科メンバーとともに、岐阜県恵那の調査に出かけた時が最初だ。当時、所属学科は３，４年生合わせて１０人足らずの小さなものだったが、研究室の共同テーマとして、教育とかかわらせた地域調査・地域教育研究を進めていた。その指導者のお一人は、つい最近１００才でお亡くなりになった太田堯先生だ。

その地域も、高度経済成長のなかで、急激な地域変貌がすすみ、教師たちは「地肌の教育」というキャッチフレーズで、地域に根差す教育を追求していた。私は、結局、そのことを卒業論文にした。ということで、その地域に滞在して、地域調査を行った。行政データ・歴史資料・聞き取りに加えて、子ども達とも直接かかわる活動を展開した。農業センサスなど行政資料に眼を通し、農業の激変を目の当たりにした記憶が残っている。

これが現在に連なる地域調査の最初の体験だった。

2019 年 03 月 10 日

沖縄にこだわる　私の地域研究史２

大学院では、「生活指導」を専攻したが、研究は地域とのかかわりは薄かった。しかし指導教官から、地方の教員養成

大学に就職して、地域にかかわる研究・仕事をすることの楽しさを繰り返し聞いた。そのころ、沖縄出身の恵美子と出会い、沖縄就職の話がもちあがった。話しても信じられないほどのドラマを経て、沖縄大学・琉球大学に就職し、沖縄じゅうを駆け巡る生活を１９７２~１９９０年に送った。

沖縄にきたのは、日本「復帰」直前だったが、その時以来、沖縄と日本をめぐって、民族・エスニック・地域といったことにかかわって、沖縄の、そして私自身のアイデンティティを考え続けてきた。それについては、「魅せる沖縄――私の沖縄論」（２０１８年高文研刊）で、これまでの思考をまとめあげた。

そして、沖縄教育界との深いつきあいをすすめていく。そこでは、日本を標準とする強固な思考のなかで、「沖縄は遅れている」という異口同音の発言にしばしば出会う。地元沖縄にはよい所が全くないかのようだった。それにしても、強烈な沖縄愛に満ちているから出てくる発言でもあった。そこで、私は、沖縄にある実践の事実をもとにして、実践の改善を強調し続けた。そのあたりは、「沖縄教育の反省と提案」（１９８３年明治図書刊）で多くのことを書いた。さらに、「沖縄県の教育史」（１９９１年思文閣）で書き綴った。

１９９０年から２００４年までは、愛知生活を送ったが、沖縄とは対照的に、地元の愛知についての語り合いがとても少ないことが印象的だった。

さらに２００４年から沖縄生活を再開する。玉城生活早々から「玉城ユンタク」というのを毎月開催して、いろいろな方々と語り合い、南城市スタート後もしばらく「南城ユンタク」を続けた。そのなかで、再び沖縄について考え始めた。教育については、「沖縄おこし　人生おこしの教育」（２０１１年アクアコーラル企画）を発刊し、沖縄おこしとかかわらせて沖縄教育を考えた。

こうした私個人の経過を踏まえて、現在取り組み中の南城市の「民俗」調査、つまり各集落を舞台に展開される人々の暮らしの聞き取りを中心にして調べる活動に入った。

2019 年 03 月 18 日

地域調査の多様なアプローチ　私の地域研究史３

南城市の集落ごとの「民俗（暮らし）」の調査は、特定の専門分野に限定してすすめるわけにはいかない。次のような諸問題を関連する分野の視点をもちつつすすめることになる。

いくつもの検討アプローチと主な関連研究分野

１）農業生産　商工業	経済学　経済史
２）地域統治	歴史学　行政学
３）消費生活　生活改善	民俗学　人類学　民族学　家政学
４）教育	教育学
５）文化・言語	言語学　文化史　芸術芸能史
６）宗教・信仰	宗教学　民俗学

７）人のつながり　コミュニティとアソシエーション　　社会学
８）自然・地理　　気象学　地質学　地理学　生態学
９）軍事　　軍事学　地政学
１０）集落配置　家屋建築　　建築学
１１）人口　生殖　　人口学

調査活動に携わる人には、本業としての研究者もいるが、そうとは限らない方もいる。それらの方々が、関連しそうな研究分野を参照しながら調査を進める。その際の留意点をいくつかあげよう。
１）一つの研究分野に絞るよりも、諸分野の研究を学際的に参照しながらすすめる。
２）米軍は、自らの沖縄統治方針を練り上げるために、地域研究的要素を多分に持っていた文化人類学・民族学研究をおおいに活用した。それに対して、米軍統治とは対照的な住民の視点からの研究が求められる。
３）これまでの市町村史に掲載された民俗関連の調査の多くは、１９世紀末から２０世紀初めを対象にすることが多かったので、結果として１９００年前後（つまり明治後期）の像が浮かび上がってきた。もう少し言うと、明治後期の土地整理や風俗改良運動以前の姿といえるものが多そうだ。
４）２０１０年代後半の現在、ヒアリングを中心にした調査をするとなると、２０世紀半ば以降、さかのぼれるとしても昭和１０年代のことが対象となる。
５）２０世紀に入る頃以前と、２０世紀半ば以降との間には、劇的といえるほどの変化がある。いくつかあげると、
明治後期の土地整理や風俗改良運動期以降の変化
沖縄戦と米軍統治に伴う変化
農業主体の集落から「勤め人」主体の集落への変動　商品経済中心への変化
生産だけでなく、生活における集落の共同性のありようの変化。とくに、共同性が劇的に低下し、集落住民の全員参加というよりも任意参加イメージが増大している。

2019 年 03 月 25 日

南城学？　私の地域研究史４

前回（３月１８日）述べたことをおさえながら、私も調査活動をしてきた。そしてその準備として南城市に限らず沖縄全般の集落について、このブログでいろいろと書いてきた。参照していただきたい。
「沖縄の集落」(2015 年 12 月～2016 年 5 月)　『浅野誠　南城 2013～2017』に収録
「第二次沖縄の集落」(2016 年 9 月～2017 年 3 月)　『浅野誠　沖縄論シリーズ６　産業経済　政治　生活　集落　自然・環境　芸能　2010～2018 年』に収録
いずれも、「浅野誠・浅野恵美子の世界」https://asaoki.jimdo.com に掲載

私の元々の専攻分野は教育学である。今回の調査に引き付けて言うと、日本教育史である。だが、ここ２０～３０年は、しばしばその範囲を飛び越してきた。とりわけ、今回の南城における集落の民俗（暮らし）の調査研究では、多彩な世界に飛び出していくことになった。教育学にかかわることは、全体の１０％にも満たない。

今回の調査研究の特質は、専門分野の視点よりも、「南城」と対象が限定されていること、いいかえると焦点化されていることにある。地域研究にはそうした例が多い。とくに沖縄研究はそうした研究史を豊かに蓄積している点に特質が見いだせよう。それを『沖縄学』と表現することもある。

沖縄学という表現にならっていうと、今回の調査研究は『南城学』といってもよいだろう。「学」とまでいかなくても「論」「史」とはいえよう。『南城論』『南城史』である。そのなかの「集落学」「集落論」「集落史」なのである。

そうした仕事の前例としては、佐喜真興英「シマの話」などがある。１００～１５０年前の話だが。そうしたものを参照するが、ここ１００年以内を対象とするとなると、参照できるものは、それほど多くない。とくに南城での今回の調査は、聞き取りを中心に組み立てるので、どうしても、ここ数十年間のことに絞られがちだ。

また、南城市内７１の全集落を対象にしている。数百年以上の長い歴史をもつシマ、３００～１００年前に、首里などから移住してきた士族が中心となって作った屋取集落、ここ５０年以内に作られた新興団地など、実に多様な集落で構成されている。

それだけに難しさを伴う。ということで、現在は第一次作業が進行中というところだ。全集落が完成するにはかなりの年数がかかるだろう。私自身も、最後まで付き合いたいとおもうが、年齢的にどこまでできるだろうか。

2018 年 11 月 21 日

SNS スマホ　情報収集と発信３

５）SNS

SNS が、情報交換をめぐって新しい世界を作っている。幼児や高齢者を除いて、スマホのようなものを使える人は、ほぼすべてが SNS に参加しているといえるほどだ。そのなかで、「友達」が氾濫し、会ったこともない人とも「友達」関係があるという錯覚が広がっている。知人レベルにまで「友達」にしてしまうと、用語混乱にとどまらず、関係性混乱にもなってしまう。

そして、その「友達」を介しての情報拡散が行われ、「友達」のメディア化といえる状況が生まれている。それらに並行して、バーチャルな世界とリアリティとの混同が広がっている。そのなかで、バーチャルの世界への逃避・閉じこもり、リアリティへの渇望と拒否などが同時に進んでいる。

1950 年代の映画、60 年代後半以降のテレビは、人々の情報収集では大きな位置を占めていたが、2010 年代以降のスマホを通しての情報収集は、それらとは次元が異なるほど大きなものとなっている。そして映画やテレビとは異なって、双方向性や選択性という点での強みがありながらも、情報支配的状況の広がり深さにおいても次元が異なる状況を生み出している。

６）スマホ

スマホは今日ではきわめて有用なツールとみなされている。しかし、スマホを介さないと関係をつくれない、維持できないというなど、「スマホ依存」とでもいいうる状況が広がっている。そのなかで、「スマホを使うのではなく、スマホに使われる」とでもいいうる状況も見られる。

この事態から、個人個人がもつ直接のリアルな関係性を基礎にして、必要に応じてスマホを使うというありように移っていくことを個人個人が追求していく必要がある。

ところで、これまでのメディア同様、一定期間たつと、スマホも次のより簡便なものに移っていくだろう。とすれば、スマホ時代はどのくらい続くのだろうか。

７）なぜ私はスマホを使えないのか、使わないのか

私は、1990 年代初め、今のスマホよりわずかばかり大きいだけの携帯型ワープロを使用していた。だから、スマホを使いそうなタイプである。だが、使っていない。事情が変化したからだ。

まず老眼という眼の問題。そして、あらためて操作を習得するのが面倒だと思うようになったこと。最大の理由は、使う必要性がないことにある。パソコンとガラケイで間に合っているからだ。というのは、旅や外出時間が短くなっているためだ。あったらいいなと思ったのは、停電・インターネット回線不通の時だけ。でも、２０１８年１０月初めのように、一週間以上の不通は、ここ３０年間で一回だけだった。旅といっても、一週間以上の旅は、ここ 15 年間では一度もない。

2018 年 11 月 15 日

情報収集と発信２

３）情報発信

情報は受け取るだけではない。発信する活動がある。情報をめぐる主体性を考える際に、情報発信は決定的に重要な役割を果たす。

身近な人間関係の場合、情報共有、情報交換を通して、双方とも発信者であり、同時に受け手であるということも多いから、情報における主体性を考えるときには、基礎的な位置にある。だから、孤立・ひきこもりが身近な人間との関係を含んだ人間関係で生まれやすいものであり、その一方でスマホ・テレビなどを介して、他の世界とはつながっているとしたら、その構図の検討が必要となる。

今日焦点化されているのは、身近さを超えた広く多様な世界とかかわっての情報の受け取り、情報発信の問題である。そこでは、身近な関係においては成立しやすい相互性が、弱くなる点に留意しなくてはならない。そこでは、情報の受け取り手が受身になる状況が加速されてしまう。

それを防ぐためには、身近な関係を超えた所でも、情報の主体となるという意味で、できる限り発信者になることが求められる。インターネットには、情報発信を広汎な人々が行うことが期待されてきた。とはいえ、情報発信の経験と知恵の蓄積が弱い人は不利であり、発信する側による誘導が強い力を持つことが多い。

ということは、インターネットによる情報発信のハードルが高いことを示す。そこで、作り出されたものが「いいね」であり「ともだち」だ。しかし、それらが、発信性と相互性をどれだけ帯びているかを考えるとき、いささか心配になる。そこで、メールや SNS を通してのやりとりにおいても、相互性発信性を高める工夫と努力が必要になる。

ついでにいうと、私個人は、原稿書きを通しての発信から、ブログを通しての情報発信に重点が移ってきており、現在の生活のかなりの部分を占めている。

４）情報操作

空前の量の情報がとびかうなかで、情報操作も空前の規模のものになっている。まず、アクセス制限・禁止を含めた

情報秘匿。そして、偽情報ないしは歪曲された情報がある。政治の世界では、それらが行われやすい現実がある。また、マスコミをとおしての商品宣伝にも広く見られる。専門家にしかわからない文章で、一般の人を理解不能状態にするのも、その類かもしれない。

2018 年 11 月 09 日

情報収集と発信１　インターネット回線切断をきっかけにして考える

２０１８年９月終わりから１０月初めに起きた、停電・電話・インターネット回線不通は、情報だけでなく人とのつながりの長時間にわたる大幅制限という事態を私たちに与えた。日常的に情報過多であった私にとっては、そこからの解放ということにもなった。といっても人とのつながりは過多ではなく、適切な量だったので、逆に連絡がとれなくて困ったが。

そして、情報過多のなかで、どのような情報をどのように得るのがいいか、ということを考えるきっかけにもなった。

情報収集には、次のようなものがある。

直接の見聞・体験

口コミ　会話・対話

書籍

新聞・テレビ

インターネット・メール・SNS

各個人において、これらの選択創造がどのように行われているのだろうか。いいかえると、情報の渦のどこに自分を置いているのだろうか。それらを考えて情報に接していかないと、情報の大量さ多様さが、人々に豊かさをもたらさないで、情報に制覇され操作される危険性を広げる。

適切な情報環境に自分を置くことができれば、人々を豊かにするだろう。そうした意味では、受身的な情報の受け手だけでいることから卒業していく必要があるだろう。その点にかかわって、いくつかのことを述べよう。

１）主体的な情報選択と発信の重要性

先日偶然見ていた NHK テレビで、「書籍・雑誌を読むこと」は長寿との相関が高いというデータが、専門家さえ驚かせていたことが話題にされていた。図書館の存在も大きいようだ。

情報選択や情報をめぐる活動において、テレビやインターネットなどよりも、読書の方が主体性を帯びることとつながっているようだ。大量情報が流れてくる現代において、流れてくる情報に流されてしまいがちだが、読書は、本・雑誌の選択においても、読むという活動そのものおいても、高い主体性を要求する。

そうしたことが長寿を作り出す要因になるのだろうか。興味深いことだ。

２）情報における上下関係

情報のやりとりでは、上下関係が生まれやすい。情報を発信し与える人が上で、受け取る人が下というのが多いだろう。情報によって、受け手をコントロールできるという点があるため、発信者が上になるというわけだろう。だが、受け手が情報を選択し、発信する人が選ばれるということで、対等の関係、ないしは受け手の方が強い関係もありうる。

2018 年 03 月 28 日

「地域おこし　これからの社会・世界」をＨＰに掲載

２０１３～２０１７年にこのブログに掲載したタイトルに関連する記事（他に私の研究生活　書籍コメントを含む）を、ホームページ「浅野誠・浅野恵美子の世界」https://asaoki.jimdo.com　に掲載しました。

写真は少しだけで、書籍紹介コメントを中心に、エッセイ風のものがほとんどです。

少々硬いのですが、関心のある方はどうぞ。

章タイトルと項目例を紹介しておきましょう。

Ⅰ．地域おこし

自治体の工夫　冷房など施設の維持管理費　住民の文化資本・人間関係資本を高める

地域起こし（沖縄おこし）と福祉・教育（人生おこし）とを結びつける

行政と専門的業務

経済協力開発機構（ＯＥＣＤ）『創造的地域づくりと文化』（明石書店 2014 年）を読む

１２月５日九州教育学会での私の提案要旨「沖縄における地域と教育」

「沖縄における地域と教育」の問題提起

増田寛也編著「地方消滅」中公新書 2014 年をめぐって

私の「地域起こしと人生創造――沖縄県南城市での事例をもとに――」の発表

大橋謙策編著「ケアとコミュニティ」（ミネルヴァ書房２０１４年）を読む

Ⅱ．これからの社会・世界

橋爪大三郎『戦争の社会学』光文社 2016 年を読む

平田オリザ『下り坂をそろそろと下る』講談社２０１６年

広井良典「ポスト資本主義」岩波新書２０１５年を読む

ダワー、マコーマック「転換期の日本へ」を読む

Ⅲ．私の研究生活　書籍コメント

どんどん広がる私の水平思考

理科と私　鎌田浩毅「地学のススメ」講談社２０１７年を読む

伊藤亜紗「目の見えない人は世界をどう見ているのか」光文社 2015 年を読む

アレックス・カー「ニッポン景観論」集英社新書２０１４年を読む

岡谷公二「神社の起原と古代朝鮮」（平凡社２０１３年）を読む

2017年09月01日

自治体の工夫　冷房など施設の維持管理費　住民の文化資本・人間関係資本を高める

卓球練習での会話　「体育館に冷房があったらいいね。」

一年ほど前の卓球大会の際、参加費が１０００円近く高くなるが、冷房が効いた施設がいいか、これまで通りでいいか、というアンケートがあった。

暑さのなかでも、競技の性格上、窓を閉め切ってする卓球試合では、しばしば話題になることだ。冷房施設のある体育館は多くない。そこで試合ができるとしても、参加料に上乗せして冷房をきかせるかどうかが話題になるのだ。参加者が１０００人もいれば、低額でなんとかなるが、通常は１００～３００人ぐらいの参加だから、冷房をかけるとなると、５００～１０００円ぐらいの上乗せ支払いが必要だ。

似た問題として、国の基地周辺整備経費で冷房施設がつけられた学校に、これまで国が負担してきた電気代を国が支出しないということが報道され、話題になった。もしこれを自治体が負担するとすれば、とんでもない額になり、支出できる自治体は少ないだろう。

国は、施設を建てる経費について、高率補助をだすが、その後の維持管理費は、自治体任せという例が圧倒的に多い。見通し能力の高い自治体は、施設建設に二の足を踏む。住民も自治体任せにしないで、自ら考え行動することが求められる。

類似の問題をあちこちで聞く。

少し異なることだが、先日訪れた小田原市の市民交流センターは、駅前の一等地に立つ立派な建物だ。その一角に、無料で使用できるオープンな集まりのためのコーナーがあった。会議室を借用するとかなりの費用が発生するなかで、使い勝手のよさそうな印象を受けた。ただし事前予約が必要だ。オープンなので、外からの音や視線が入るが、それが逆に、団体活動のアピールになるかもしれないな、と思った。

もう一つある地方都市では、健康増進部局に、助産師を配置している。保健師はどこでも配置されているが、助産師というのは初耳だ。周産期の母子保健に有用な働きをするだろうし、少子化への対応でも興味深い活動ができそうだ。

先の記事で紹介したが、真鶴町の散策の最後に、時間があったので貝類博物館に入った。そこで、つい最近まで琉球大学で研究していたが、この博物館の教育普及活動の職員として赴任した若い人とおしゃべりした。この博物館は、元教育長が大量の貝類を収集して、私設博物館で展示していたが、それを町が引き取って、町立博物館にしたとのこと。久米島ホタル博物館も同類だろう。そういう施設を拠点にしての教育普及活動は興味深いことだ。

こんな風に旅に出ると、新たな試みに出会う機会がある。

ところで、施設について行政評価というと、費用対効果の用語に象徴されるように経済的に採算が合っているかどうかが中心になってきた。これは経済資本の問題だが、それに加えて、その施設が、その地域の文化資本・社会資本（人間関係資本）をどれだけ豊かにしたかどうかをも、評価基準にしてはどうか。住民目線でいうと、この二つの方が重要だ。国目線でいうと、経済資本の基準が優先するだろう。だが、金銭中心ではなく、文化・社会（人間関係）中心で考えるのが、地方行政では不可欠の事だろう。

民活がいわれ、指定管理者などの委託事業の増加が目立つこの頃では、事業委託に問題が集中し、市民参加・市民共同の促進が抜け落ちる傾向が目立つ。文化資本・人間関係資本を増やす市民参加・市民協同の促進を軸にした事業展開を期待したい。その実例である学童クラブや保育園の市民（保護者）協同の歴史は長い。１９７０年代初めまでの沖縄

での公民館保育もその典型だろう。

2017 年 06 月 02 日

このごろの私の研究生活

６月に入るが、今年はなかなか暑くならない。そのせいか、ライチの実が赤くなるのが遅いなど、いろいろの植物がゆっくりしている。サガリバナの開花だけが早い。それでも、もう一週間もすると、庭畑のいろいろな出来事が連続するだろうから、このブログもそんな記事が多くなりそうだ。

今回は、庭畑記事を予定していたが、趣を変えて私の研究生活について書こう。

琉球大学授業も昨年度で終了し、今年度は今週終了した看護大学、そして今月の４回だけの沖リハの授業だけだ。７０歳を過ぎたから、大規模授業は体力的に無理なので、少人数の授業だけ引き受けている。お陰で、授業負担がぐんと減った。それでも、今後数年は、授業をすることになりそうだ。この年齢まで授業をするイメージはなかったが、授業が好きな私には嬉しいことだ。

ということで、私の日常生活での研究の比重が高まった。毎日数時間以上、書斎型の仕事をしている。その仕事をインプット（読書や資料収集分析など）とアウトプット（原稿執筆など）に分けると、その比重も後者中心に移ってきた。

ここでの生活は満１４年になろうとしているが、当初はツンドク書籍が１００冊ぐらいあったが、それもずっと以前になくなった。それでも月に一万円以上書籍を購入し読む生活を続けてきた。というので、インプット過剰状態に陥ってきた。だから、最近では、アウトプットの比重が高まってきた。

アウトプットには、依頼されたものと自分でしたいことの二つがあるが、１５年前には、３割以上あった依頼原稿の比率は減り続けている。お蔭で、自分が好きなことを中心にして、自分なりに創った仕事中心の研究生活になっている。依頼された仕事の現在の中心は、南城市史民俗編のものだが、これまた、自分なりに進めていく仕事なので、現在は、ほとんどが自分なりに進める仕事となっている。

２０年ぐらい前までは、いくつもの依頼原稿を抱え、締め切りに追われた生活とは比べようがない研究生活だ。

だから、無理をするということはほぼない。マイペースですすめられる。結果的に毎年、４００字詰め原稿用紙換算でいうと、数百枚書いているが、原稿書きで体調を崩したことは、ここ十数年ない。原稿一本書くごとに、体重が１～３キロ減り、体調を壊すことが多かった２０代、３０代と比べると、雲泥の差だ。

今、中心に進めているのは、「沖縄らしさ・沖縄的とは何か」といった類の単行本執筆だ。興味深い仕事なので、準備作業原稿は、３０～４０万字になるほどだが、それを集約し整理して現在２２万字までに絞りあげた。それでも冗漫なので、１５万字以下にスリムにする作業を進めている。秋にはまとめあげたいと思っている。

この作業では、もともとの私の専門分野の教育にかかわることは、全体の１～２割に過ぎない。どうやら、教育研究者という肩書ではなくて、沖縄研究者という方がいいのだろうと思う。

その作業が終了した後の研究も楽しみにしている。「取らぬ狸の皮算用」だが。南城を軸にする地域論、そして人生創造論などといきたいのだが、どこまでできるのだろうか。

2017 年 05 月 19 日

旅行目的の多様化

○ 体験型旅行も広がっている。三線・舞踊などの芸能体験は人気だ。収穫体験などの農業体験、陶芸やガラスなどの工芸品つくりなども人気を集めている。日常的には接する機会がないジャンルの体験に関心が集まっているようだ。とはいえ、趣味や職業で日常的に取り組んでいることが、他地域ではどうなっているのか、といういわば「研究交流・技術交流」的なものを求める例もなくはない。

体験型は、地元民との交流という形でも広がる。民泊などは、そうしたものを含むことが多い。

初体験がリピートや長期滞在を呼び込むきっかけになることも多い。

○ 近年注目されている一つは、買い物目的の旅である。大量物販店が観光客を集めている。「復帰」前後の沖縄では、本土価格の数分の一のスコッチウイスキーを買い込む本土旅行者が多かった。かつてのほどのうま味はないにしても、免税店を活用して土産や嗜好品を買う旅は今も残っている。身近に隣国があるヨーロッパでは、酒税が安い国への一日旅行で、大量の酒を買い込むことに出会う。

変わり種としては、海外からの医療検査目的の旅行が広がっている。

沖縄から観光旅行に出かける人にも、土産物や、旅先でしか手に入れることができないものを求めることが観光の主目的の一つになっている例がある。行きは空の大きなスーツケースを一杯にして帰るなどもそうだ。

○ 社会的関心をもち、社会運動参加目的もある。平和学習が典型例だが、近年では反基地運動へのかかわりも増えている。

○ 研究調査としての旅行。中高生の平和学習目的の修学旅行などもその例だろうが、大学生や研究者ともなると、一層専門的な事項にターゲットをあてたものとなる。

大学生のゼミ旅行などは、かなりの量になるだろう。調査対象がある地域に長期滞在して研究する大学院生なども多い。

○ 研究者では研究調査や研究協議だけでなく、学会参加という形の旅も増えている。研究的なものに限らず、大小の規模を問わずコンベンションが増加している。沖縄でのＭＩＣＥには、そこに焦点をあてるものもあるが、交易会・見本市といった商業目的が中心のようだ。

そのためもあるのか、リゾート型とは対照的なビジネス型ホテルが、観光客にも結構活用されている。

○ コンベンション参加のついでに付近を見て回る旅行も多い。そういう人のために、オプショナルツアーが用意されることが多い。なかには、研究と関係がある場所へのフィールドツアーなどもある。

北欧で、クルーズ船のなかで懇親を兼ねた会議を開くとか、クルーズ船を宴会場にするという「旅形式」を見たが、そうした多様なありようがアジア・日本・沖縄でも広がるのだろうか。

○ 若者対象にワーキングホリデーという形での長期の海外滞在型旅行をする例は多い。海外からくる例では、外国語教師をする例が多い。１５年以上前の話だが、カナダのトロントで、日本での１～２年間の外国語教師を募集したところ、何百人という応募者があったということを、面接業務を担当する既経験者から聴いたことがある。

大学を卒業したらすぐに就職という日本の習慣とは異なって、欧米では卒業後しばらく長期海外旅行など世界探訪・人生経験を経たのちに、就職を考えることはよくある例だ。

2017 年 04 月 09 日

平井威ほか「ブーケを手わたす―知的障害者の恋愛・結婚・子育て」を読む

著者からいただいた本だ。書名を正確に書いておこう。平井威・「ぶーけ」共同研究プロジェクト『ブーケを手わたす―知的障害者の恋愛・結婚・子育て』学術研究出版／ブックウェイ２０１６年

感動的な本だ。学術的な性格をもった本だが、とても読みやすく、専門書というよりドキュメンタリーという感じだ。長崎県にある南高愛隣会が立ち上げた結婚相談室「ぶーけ」を中心に展開した実践を多角的に調査研究したものだ。

「知的障害者に結婚・子育てなんて」と思っている人は、是非お読みいただきたい。

第一章は、本書のメッセージを簡潔に述べているので、小見出しを紹介しておこう。

第一章　知的障害者の恋愛・結婚・子育て

性をエンジョイすることは人間らしく生きること

知的障害者の性は未だに統制されているのではないか

支援スタッフの価値観や知識・経験・福祉制度に左右されている

親や支援者を介さずに、当事者が直接つながるネットワークは作れるか

人生領域の意思決定支援に「結婚」が含まれる時代へ

第二章以降のタイトルも短縮して紹介しておこう

第二章　結婚相談室「ぶーけ」の事業

第三章　「ぶーけ」の実際―６年越しの恋から結婚生活を手にした高城麻央さん

第四章　田島顧問に聞く　　※創設者

第五章　「ぶーけ」のしてきたこと、「ぶーけ」で変わったこと

第六章　「ぶーけ」を利用している人たち

第七章　交際相手を探している人への支援

第八章　交際している人への支援

第九章　パートナー生活者への支援

第十章　山岡家、家族再統合の物語―児童虐待からの回復

以下略

私自身も、本書を読んで初めて知ったことばかりだ。

本文のある一節には、「交際・恋愛、結婚、子育て支援が必要なのは障害者だけではない」とあるが、現代はそういう時代であり、そのなかで、本書にある取り組みは先駆的な意味さえ持っている。

おすすめの本だ。

2016年09月14日

沖縄における女性の強さと家父長制

沖縄では女性が強いという発言は、よく聞かれるものだ。と同時に、男性が、これまでの「慣習」にあぐらをかいて、「いばるけど、だらしない」という発言もよく聞く。なかには、姉妹が兄弟を守るウナイ神信仰や、聞得大君やノロに象徴される神事での女性の高い位置に触れて発言する人もいる。

「慣習」というのは、家父長的なジェンダー感覚をもつものだ。それにもとづいて、女性は「弱い位置・役割」に押し込められて苦難をこうむり、それが今でも続いている、という発言も多い。

双方とも、発言だけでなく実際の行動が結びついている。そして、強いと同時に弱い女性も男性もいる、という生活感覚を持つ人は多い。

では、対照的に見えるこの二つの発言をどう理解すればいいのだろうか。

女性の位置・役割を、男性支配、男性に従属するものにしていく上で、イデオロギー的に大きな役割を果たしたのは、儒教イデオロギーといえよう。それにかかわっていくつかのことを書こう。

儒教イデオロギーが沖縄に本格的に導入されるのは、１７世紀のことだ。薩摩からと中国からの二つのルートがある。それが、首里王府の支配イデオロギーになっていくのは、羽地朝秀治世を経て、蔡温治世になるころだ。『御教条』が象徴的存在だ。主として士族の中に浸透していくが、地方農村へは、地方役人層を媒介にして浸透させようとするが、王府の思うようにいってはいない。

地方農村を含めて、一般民衆の世界への浸透は、むしろ明治後半期であり、修身教授をはじめとする小学校教育が重要なルートであった。また、明治民法が浸透する中で、家父長的な家制度の浸透も始まった。それらと並行して、士族のみならず、地方農民へも家父長的な門中制も浸透していく。その際、「相談」に応じたユタも家父長的イデオロギーの色彩が濃い「判じ」を出していく。そのなかで、女性が継げないというトートーメー問題が広がり始める。

だから、地方農村における共同体秩序が、「昔から」儒教に彩られた家父長的であったとは簡単にはいえないかもしれない、それは、明治期に形成されたという色彩を多分に帯びるからだ。

こうしてみると、他府県と比べると、儒教イデオロギーにもとづく家父長的思想・制度の沖縄での浸透期間は比較的短いといわなくてはなるまい。

そして、それらが、「女性の強さをどれだけ屈服させていったのだろうか、いけなかったのだろうか」という問い、あるいは、逆に「それらからいかにして脱却していったのか、していくのか」という問いかけも必要だろう。そして、そうしたことが、現在の女性の強さ・弱さとどうかかわっているのか、という問いも必要だろう。

以上、儒教イデオロギーを中心にして述べたが、それ以外の視点からの史的研究も近年進められている。たとえば、喜納育江編著『沖縄ジェンダー学１　「伝統」へのアプローチ』(大月書店2014年)、そのなかの赤嶺政信「男系原理と女性の霊威」、豊見山和行「前近代琉球の家族・夫婦・親子をめぐる権力関係」や、あるいは比嘉政夫をはじめとする民俗学研究は、そのあたりにも重要な示唆を与えている。これらについては、改めて書くつもりでいる。

こんな視野をもって、沖縄における女・男の支配差別関係、あるいは強さ・弱さといったことを考えていきたいものだ。

2016年09月04日

老前整理の難題　書籍・授業資料・研究資料の整理先

写真は、我が家の図書室光景

数年前から少しずつ進めている老前整理。衣料とか書類とかは順調に進み、あと数年でメドがたちそうだ。

難題は、次のものだ。

1）授業資料。授業準備のための授業ノートなどは難しくはなく、整理はほとんど終わっている。

難題は、授業の産物として、受講生たちが作成したレポート集、活動報告、写真の処理だ。

１９７０年代から１９９０年代にかけてのものが膨大にある。私個人が作成したというより、受講生が共同で作成したものだから、どうしようかと考えあぐねている。とくに写真アルバム（ビデオを含む）は、２０～３０冊はある。

2）研究資料

沖縄教育史関係資料は、現在進行中の作業にめどがつく数年後に、整理作業を始める予定だ。

また、１９８０年代後半の「集団づくりの新しい展開」と「新版学級集団づくり入門」の間にした作業の資料をどうするかは未定だ。

3）数千冊の書籍

図書館が引き取りをしない時代に、いろいろな人が困っているだろう。

私と恵美子が所有するものは、多分５０００～１００００冊だろう。

すでに、希望者には差し上げる作業を進めているが、まだ、全体の１～２割の進展だろう。

今は、贈呈物を、写真のように、分類してケースに入れて、訪問した希望者に差し上げている。

私の健康寿命時期を８０代半ばまでと推定して、それまでに処理を終えて、子どもたちに処理の苦労をさせたくないと思っている。私のものは、書庫の一角に、小さく「浅野誠資料コーナー」のようなものを作って、すべてを収めてお

きたい。そのためには、現在のこれらの所有物の９８％を処理する必要がある。

何かいい知恵があったら、ほしいものだ。また、引き取り希望の方がおられれば、連絡してください。

2016 年 08 月 05 日

乱読の楽しみ

このブログでの読後感想を書くことが減ったのは、他に書く記事が増えたあおりを受けたためだ。読書量が減ったわけではないし、読後感想を書きたい本が少なくなったわけではない。

相変わらず、月に１０冊ぐらい読んでいるので、私の頭への入力超過状態が続いている。少し読書量を減らそうと思っている。

今回は、この２か月足らずに読んだ本のなかのいくつかを紹介し、一行コメントしたい。

上原直彦「琉歌百景」ボーダーインク２０１４年

琉歌を作ってみたいなという気持ちがある。その予習の意味を込めて読む。面白いが、どうやら私は琉歌をつくるには予習の大幅不足であることを思い知らせてくれた本だ。

西村昌彦「詳しいハブ対策」新星出版２０１４年

今年に入って、我が敷地のハブ取り網にはヒメハブ三匹がかかったが、その網導入のきっかけを作り、指導していただいたのが著者だ。ハブ地帯の我が家周辺では、重要なことだ。

小玉重夫編「教育の再定義」岩波書店２０１６年
　タイトルの通り、教育・教育学の再定義を試みる注目すべき本だ。現在の教育学の最前線にいる著者たちの力作がそろっていて、興味深い提案を多く含んでいる。私なりの考えをまとめてコメントするには、長期の思考が必要なので、いつか文章化したく思う。

ウォード、カーシュヴィンク「生物はなぜ誕生したか」河出書房２０１６年
　４００ページを超す大作で、地球史・生物史の本格的叙述だ。私のような素人にも理解でき、興味がわくように書かれている。私にとっては、ほとんどが初めて知ることだ。最新研究の成果も盛り込まれている。

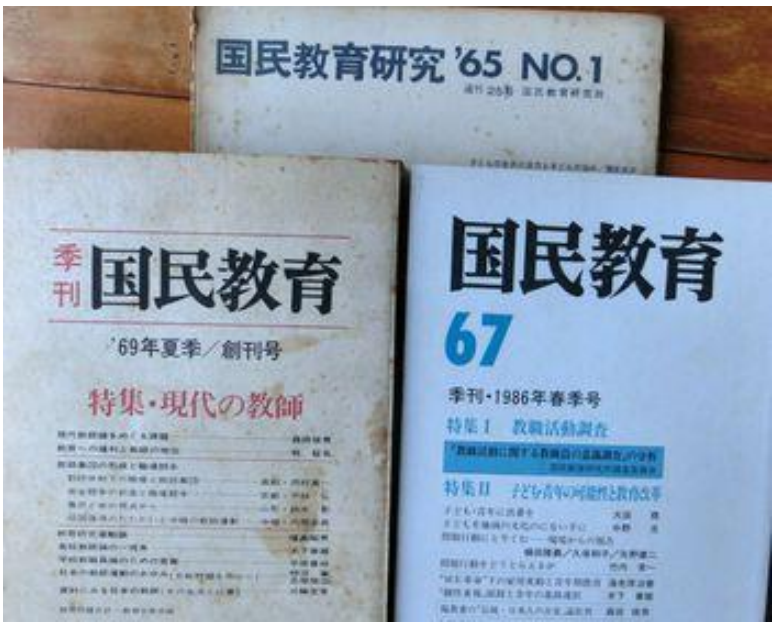
「宗教と現代がわかる本２０１６」平凡社２０１６年
　「聖地・沖縄・戦争」が特集され、宗教を「現代」「沖縄」「聖地」「戦争」という角度から描いているので、とっても興味津々だ。大判で２５０ページで質・量ともに中味が濃い。

　以上の他にも、何冊か興味深い本を読んでいる。さらに、焦点化したテーマについて読み、私の研究資料のなかに入れ込むものが、地域おこしや沖縄研究などで何冊もあるが、それは関連ブログ記事あるいは著作に反映させるつもりでいる。

2015 年 08 月 04 日

老前整理　「国民教育」バックナンバーの引き取り先を探す

　２～３年ほど前から、「老前整理」を始めている。元気なうちに、持ち物を整理することだ。数千冊ある書籍もそうだ。来客に持ちかえりいただくことをお願いして、少しずつ進めている。２割程度が整理完了しただろうか。
　今回は大量なので、この場を使って、お知らせする。
１９６５年からの「国民教育研究」２５号から終刊号まで
１９６９年（創刊号）～１９８６年（終刊号）６７冊　「国民教育」
　そのほか関連物。　全部で約１００冊。



　ご希望の方は、ご連絡ください。
　こうしたことを、あと数年間継続して、手元に置く必要がある物以外は、整理したいと思っている。

2015 年 05 月 22 日

萩尾俊章「泡盛の文化誌」、新城明久「沖縄の在来家畜」を読む

このごろの私は、「沖縄的なもの」についての基礎作業をすすめるのに、かなりの時間を割いている。数年続きそうだ。

その作業の一つとして、私にとって未知に近い世界である分野のこの両書を読んだ。萩尾俊章「泡盛の文化誌」（ボーダーインク２００４年）と新城明久「沖縄の在来家畜」（ボーダーインク２０１０年）である。両書とも多様な研究の成果を集約したもので、とても参考になった。そのいくつかを紹介しよう。

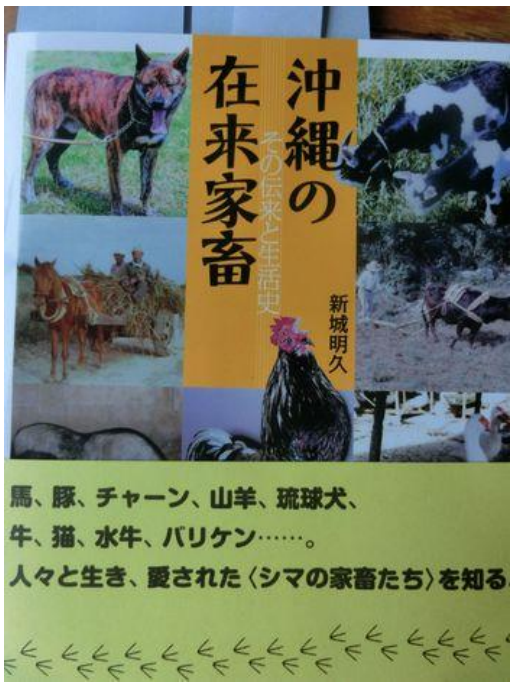
・中国の福建ルートあるいは東南アジアのシャムルートで伝わってきたものをもとに、おそくとも１５世紀後半には、泡盛が沖縄で作られ始めた。その後、飲むためだけでなく、交易品としても製造された。１８世紀の蔡温時代には、泡盛の製造禁止措置をとるかどうかについて、王府のなかで議論があり、禁止されたこともあった。明治中期には、個人の酒製造が禁止された。

・沖縄では、野生動物で家畜化までにいたったものはない。家畜類は、海外から持ち込まれた。

古い順に並べると、犬、鶏、牛（８世紀）、馬（１１世紀）、山羊・豚・かんのんアヒル・チャーンなど（１５世紀後期）、猫（不明）といった具合のようである。

それらは、農耕用、食用、交易品用などに飼育された。馬のように、近世では士族専用のもの、あるいは交易用に使われたものもあった。

こうした人々の日常生活に深く位置づいているものを、どのような社会背景で、どのような社会的個人的必要にもとづいて、どのような社会的位置にある人々が、どのように営んでいたか。また、そこには、海外交流がどうかかわり、「沖縄的な」ありようが生まれ維持され変化消滅していったのか、こんなことを知りたいと思う。



たとえば、泡盛の個人製造の許可禁止が、どのようなことを意味しているのか。ペットとしての「家畜」は、人々の暮らしのなかでの精神のありようと、どのような関係を結んでいたのか。

また、泡盛とか家畜とかは、食事・音楽芸能・スピリチュアリティなど他の生活の諸分野にかかわりをもつ。たとえば、「ウンサク」と呼ばれる口かみ酒のことが出てくるが、私が住む字中山の大きな行事の時、それが登場する。今では、何かで代用しているかもしれないが、酒は、人々のスピリチュアリティ、民俗行事で大きな位置を占める。

また、家畜などは、その時代の産業、とくに農業や運送業では重要な位置を占める。沖縄の自然環境のなかで、どのような家畜が活用されたかは、「沖縄的なもの」を構成する。

こんなことを考えながら、今後もこの種の本を読んでいきたい。

2015 年 04 月 22 日

喜納育江編著『沖縄ジェンダー学１　「伝統」へのアプローチ』大月書店２０１４年を読む

「沖縄的なもの」について考えている今、示唆するところの多い本だ。関心をもった所示唆をうけた所のうちいくつかに絞って、紹介コメントをしよう。

「沖縄」と「ジェンダー」という二つの視点、ないしは二つの分野を交差させて論じることは興味深い探求を可能にする。私が現在すすめている作業にもそうした要素が多分にある。

本書も私の作業も、２つの掛け合わせだけでなく、３つ４つを掛け合わせての探求も含ませている。シリーズで出される予定のようだが、本巻は「伝統」ということに焦点化した掛け合わせが追究されており、歴史的アプローチによる論稿が多い。

序章では、次のように述べられる。

「「沖縄女性」が、従来の民俗学や歴史学にある男性中心的な視点によってある種の神話性をともなうカテゴリーとして構築されてきたならば、その神話は問い直され、解体されなければならない。そうすることによって、学問の伝統の中で表象されてきた「沖縄女性」を、女性を主体とする視点から語り直すことが可能となる。」ｐ２０

重要な指摘だ。それは次の注目すべき叙述にも表れている。

「「女性の霊性」は多くのケースにおいて主体的に発動する「自明のもの」ではなく、王権を支えるための政治的支配構造に利用されていた可能性と不可分ではないとこの章では結論づけている。」ｐ２０－２１

歴史分析のなかでは、近世の地方社会では、男女ともに農業に従事しているわけではなく、女は農業、男は漁猟に従事していたことに対して、農業を中心にさせたい薩摩が、男も農業に従事するように指示していたことは、大変興味深い指摘だった。

前近代―近代―ポスト近代という把握とは別に、「非近代」というカテゴリーを強調しているのも、大変興味をそそられるアプローチだ。次のように書かれている。

「前近代が近代以前を、ポスト近代が近代以降を指し、いずれも近代との共時性を示すことがないのに対し、非近代は、近代の影響を受けつつもそれによって根源的に変質することなく近代において存続しう

る価値体系を指すと考えられるからだ。近代との差異を有しつつ近代と関わりながら存続しうる世界観なり価値観に立脚する、そういうトポスとして非近代をとらえることができる。」ｐ１６９

この視点を、私も検討していきたいと思う。
文化芸能分野で、伝統とか古典とかいわれることをめぐっての次の指摘も興味深い。

「歴史の中で、伝統を継承していこうとするまさにその意図の中で失われてきたものを探究することによって、「本質」や「伝統」の継承をめぐる言説や慣行のありようを再考し、新たな表現として呈示しようとする創造行為である。それは「男」や「女」というジェンダーのカテゴリー、ひいては「沖縄」、「沖縄の伝統」といったカテゴリーの社会的な構築の過程を不問に付したまま、それらのカテゴリーに収斂させようとするアイデンティティ形成の過程を脱構築していく行為でもある。」ｐ２６
「舞踊だから基本的には技術の高さは当然重要なのだけれど、型をマニュアル化してしまったときに、身体性が逆に失われたと思っているわけ。琉舞界が「古典の統一」などというのを始めたのも問題だった。舞踊のもっている味わいは、歌や音の力を借りて伝わってくる。でも、残念だけれど、それが身体性をともなっていないときには伝わらない。」ｐ２１６

「伝統」「古典」といったことを本質主義的に固定化して把握する傾向が強いなか、これらの指摘はきわめて重要だ。これらの記述ともからんで、次の指摘は、沖縄把握にとって重要な問題提起となっている。

「チカーナの批評家グロリア・アンサルドゥーアなのですが、彼女は、ボーダーランドというのは、つねに異なるものが出会っていて、絶対に終わりはなくて、つねに変化している場所であると言うんです。私はこれを読んだときに、沖縄がまさにそんな感じだなと思っていまに至っているんですけど。お二人の話を聞いて俯に落ちました。つまり、つねに今日の自分と違う明日の自分を想定していたり、つねに自分に変化を強いる要素が降りかかってくることを恐れていないというか。変化に柔軟というか、そんな感じがお二人の共通点だと思いました。」ｐ２３４
「確固としたものがあって、それを表現するという発想ではなくて、何かメッセージがあって、それを言葉にするんじゃなくて、つくりながら、自分もつくりながらすべて試行錯誤みたいな感じで進んでいって。それって、とても力がいることだと思うんですよ。先が見えないと不安だから、できればプランをちゃんともっていて、「これだけ努力したらそこに着くね」というに見通しをもっていたほうが楽だと思うのだけど、「そんなのなくても、なんくるないさ（なんとか行けるよ）みたいな強さが必要なのかなと思って。それかなって、いまちょっと気づいた感じがします。」ｐ２３５

なかなか興味深いので、シリーズの次にも期待したい。

2015 年 03 月 22 日

浅野誠エッセイシリーズ６「異質協同・多文化」のＨＰ公開

私は、長い間、「異質協同」をキーワードにして、いろいろと論じ主張してきた。そして、関連キーワードとして、多文化あるいは多文化主義についても論じてきた。

それらについて２００３年から２０１２年にホームページならびにブログに書いたものを集約編集して、ホームページ「浅野誠・浅野恵美子の世界」に公開した。ご希望の方は、 http://asaoki.jimdo.com にアクセスし、そこからダウンロードしてお読みください。

記事タイトルのいくつかを紹介しておこう。

馬渕仁編著『「多文化共生」は可能か』を読む
アイデンティティと異質協同型独自創造
多文化社会と生活指導　　生活指導学会での課題提起
どこまでのバイリンガル能力を獲得させたらいいのか
いじめられている外国人の子ども
村上呂里『日本・ベトナム比較言語教育史－－－沖縄から多言語社会をのぞむ」を読む
小林宏美「多文化社会アメリカの二言語教育と市民意識」を読む
一つの国には、多様な国籍・言語・文化をもつ人が住んでいる
ハーディング＝エッシュ，ライリー「バイリンガル・ファミリー」を読む
キムリッカ「多文化時代の市民権」を読む
私の異質協同論の流れ
異質協同研究ノート

2015 年 02 月 13 日

沖縄独自の農業の追求へ　沖縄農業経済学会編「沖縄農業」を読む

書店の店頭で見つけた本で、2013 年榕樹書林刊行だ。私がこのところ考え続けている、「沖縄から脱出して日本本土に追い付こうとする」思考と「沖縄独自なものを追求する」思考とのからみあいというテーマが、農業問題でも鋭く問われていることを知って驚いた。

たとえば、磯辺俊彦は、１９８６年のことだが、次のように述べる。

「来間泰男は沖縄農業の基本課題を、その＜経済的後進性からの脱却＞に設定した。それは小農制の成熟のうえに、正常な商品生産の展開の道筋を模索していく課題である。／だが、誤解のないように付け加えるならば、その〈後進性からの脱却＞とは、ただ本土農業に〈追いつき、追いこせ〉の課題ではない。そうであっては、目標・手本としての本土農業は捉えられていても、本土農業批判の視点は欠落して

いることになる。本土農業の歪められた戦後展開の批判者、是正への媒介者として沖縄農業の展開の独自性（歴史的・地域的個性）が位置づけられるのでなければならない。」ｐ２１

そして、２０１０年のことだが、来間とのやりとりのなかで、次のようにも語る。

「地域個性という社会軸を持ちながら、そのなかで後進性という経済軸を是正していく、それが社会軸というヨコ軸（風土軸）と、後進性というタテ軸（歴史軸）の関係だと思う。」p45-6

また、原洋之介は、２００７年に次のように述べる。

「日本の南北の辺境におけるこのような農のあり方は、間違いなく、内地・本土とは違っている」。この違いは「市場経済の発展段階の差」によってではなく、「それ以上に」、そうとは「いい難い〈開発のかたち〉の違いがあるというべきであろう」。ひるがえって、東アジア地域にも「発展段階の差異に解消しきれない経済制度面での多様性が存在している」。これらの地域の開発方向が、欧米や日本と同一になるわけがない。」　ｐ２９

これらの論議の中で、来間泰男はこう述べる。

「沖縄は沖縄であり、日本本土的ではないものの、東南アジア的でもありません。日本本土的な要素ももち（この点が東南アジアとは異なります）、東南アジア的な要素ももっている（この点が日本本土とは異なります）のが沖縄です。日本本土の農業は、沖縄にとって「先輩格」のモデルではありますが、それと同一にはなっていけません。東南アジアの農業は、沖縄にとって「後輩格」のモデルではありますが、これにも同一化することはないでしょう。先輩といい、後輩というのは、基準を「市場経済原理」に置いてみるからです。」ｐ３７

方向性が響きあう論述はさらにあるが、それは次回にまわそう。

私は、「沖縄的なもの」「沖縄らしさ」について考える長期作業を、現在進行させているが、「沖縄から脱出して日本本土に追い付こうとする」思考と「沖縄独自なものを追求する」思考とのからみあいが、多くの領域で共通して登場する点に注目している。それにしても、農業という産業・経済の分野で、このような論調に出会うとは驚きに近いものがあった。

ひるがえって、教育や文化芸能ではどうなのか、ということが私の中心的関心の一つになっている。

この問題は、現在と今後の沖縄のありように大きくかかわる問題だ。農業でいうと、ＴＰＰに象徴されるグローバル経済のなかで新自由主義的方向をもつと、沖縄農業が崩壊する危険性が高い中での緊張感あふれる問題だ。

これらのなかで、山里敏康の次の発言は印象的だ。

「私はこれまで農協（ＪＡ）にいて、今は退職後、現場でハルサー（百姓）をしていますが、農家の声を聞いても、復帰前には子供たちを高校・大学に行かせたが、今は行かせられないと。」ｐ７４

多様な新たな試みをしながらも、沖縄農業を持続、発展させることの困難さを示唆する発言だ。

2015 年 02 月 16 日

沖縄独自の農業の追求へ　「沖縄農業」本を読む２

本書は、論者たちが異口同音に沖縄独自の農業の追求を主張するところに特徴がある。石井啓雄は、「沖縄の持っている大和に対する後進性でない、沖縄の持っている相対的独自性があるんだと、もっと強調されてですね、そしてやはり、場合によってはそれこそ自治権というのも目指すべきだと思います。」ｐ５２

さらに、福仲憲は、次のように述べる。

「そうしてくると、沖縄の農業はどうやら、自分の努力不足もさることながら、やはり周囲に取り巻く条件、どうにもならない条件に振り回され、あるいはそれに追随してきたような気がしてなりません。こう言うと、自分の努力不足を棚に上げて、と聞こえるかもしれませんが、そういう意味ではなくて、やはり沖縄の農業の今日の弊害というものは、そういうギリギリの所まで来てるのではないか、というのが、私の感想であります。

そこで、私がこういうことをお願いしました。ヨーロッパの大学の学長をしておられた、当時のゼルラ・ウンガラという博士が日本にみえました。その人の講演の一部に、こういうことがありました。「農業は、単なる経済活動だけではない。文字通り、カルチャー、つまり文化の一環を担っている。例えば、南ドイツに広がる、農地の風景。日本の大部分を占める水田の風景。これらは、その地域の文化ではないでしょうか。農業が社会的なミニマムとして、どうしても必要であるとするならば、農業はむき出しに競争にさらされては生き延びられない。なんらかの方法が必要です」。こういうことを、もう一五、六年前の話ですが、彼は発言しています。まさに、今日あるヨーロッパの所得補償方式などの、あるいは環境問題に結び付けての考え方も、そういうところにあったのかなということを、私は想像しております。したがって、農業はもう、食料問題だけではなくて、環境、あるいは今言ったように、文化、地域の文化にまでわたって、社会的なミニマムを主張できるところまで来ているのではないかと思います。農業の安定・発展のためには、社会に対して自己主張、農業の側からの自己主張をする。つまり社会的なミニマムとして、農業が必要であるならば、それが成立するような道を唱えて、自己主張しなければならないところまで、農業は来ているのではないか。

ですから、沖縄の農業は日本農業の中でも、大きな重しを持っています。それに対して沖縄の農業が生き延びるためには、「沖縄はこうありたい」「どうしてもこういう道を実現したい」ということ、そのために必要なことは、自己主張していく。そうでなければ、やはり農業は生き延びられないのではないか。」ｐ６３－６６

そしてさらに、来間の基調報告のなかで「沖縄農業は、このような気候特性を背景に、＜夏季作＞と＜冬季作＞の輪作体系としての土地利用を構成している。夏季にはその厳しい生産環境に耐え得る熱帯系の作物が選択され、冬季には穏和で湿潤な気候に適応した穀類をはじめ豆類、野菜類など多様な作物が栽培されてきた」P21 と述べたことが紹介された安谷屋隆司は、本人発言のなかで次のように言う。

「農業の生産力というのは、自然への対応の中で、世界で多様な形で発展するというのが基本的な姿である。(中略)沖縄の亜熱帯湿潤気候という一つの条件の下で出てくる沖縄農業の技術というのは、北海道型、それから本州型、沖縄型という形の一つになっている。これは特徴でも何でもなくて、意識性だと考えています。生産力の意識性、これが沖縄農業を成り立たせてきているのだと。しかし、それがある段階で乾燥地型の農業の真似をした。これはサトウキビ単一作型ですね。これをやって、それの合理化をやろうとする時に、大型の機械を乾燥地から持ってきた。その時に、沖縄の農業というのは、この乾燥地型の農業として発展する可能性があったのだろうか。いや、なかったのではないか。本来の沖縄農業というのは、土地を高度に利用する農業の体系であったわけです。」ｐ７７－７８

沖縄独自の農業の追求への強い発言の連続だ。私なりにコメントしてみよう。

ＴＰＰが象徴的だが、世界の産業を、自由競争至上主義によって平準化し、商品流通を図るというのは、各地の農業を平準化し、弱肉強食論理が世界各地の農業地域を凌駕し、地域独自のものの破壊を徹底的に進行させる。沖縄もその

例外にはしておかないだろう。

だが、生産の側にしろ消費の側にしろ、世界平準化をはかる商品経済だけですすむわけではない。いずれも、商品生産消費だけでなく、自家生産自家消費、近隣などとの共同生産消費を含んでいる。そして、そこには、地域独自の環境・文化が深くかかわっている。これらの多要素を世界平準化の商品流通論理で押しつぶしていいというものではない。それは環境・文化の破壊を伴い、それに結びついた人々の存在の破壊にまで及ぶ。

そうした見地からの、商品流通至上主義への歯止めをはかり、地域独自のものを創造することが、地球と地域の環境・文化の保持、そして人間存在の維持に深くかかわるというものだろう。

いずれにしても、農業の世界でこうした論議が行われていることには、驚きつつも、これらは、私のいろいろな考えや主張を元気づけるものと喜んでいる。

2014 年 10 月 10 日

「生活指導研究」№３１所収の長谷川裕「いじめと子ども・若者の関係性」を読む

つい最近発刊された日本生活指導学会の機関誌だが、２０１３年大会での発表論議を中心に編集されている。市販されていないので、取得希望者は、学会ブログ http://jasg.blog54.fc2.com/ を通して学会事務局にアクセスしてください。

掲載論文を紹介しておこう。

生活変容の現代性と自己形成論の課題　宮崎隆志
教育年限延長による自立支援の試み　小畑耕作
ホームレス経験者のアディクションによる社会的困窮の様相　水谷聖子
矯正施設から地域社会への移行期における定着支援センターの取り組みについて　森嶋友里子
いじめと子ども・若者の関係性　長谷川裕
「いじめ問題」と生活指導上の実践的課題　谷尻治
少年院における「いじめ問題」―少年院（矯正教育）の現場から－　山下浩史
震災復興が問いかける知と学び　鈴木庸裕
３．１１後の原発授業の課題　子安潤
原発事故後の学校と市民の連携について　小玉重夫
非行の有する遊びとしての性格―自由と遊びに関するサルトルの思索を導きの糸として－　加藤誠之

毎号のことながら、気合の入った論文が目白押しだ。

この中で、私にとって最もインパクトがあったのは、「いじめと子ども・若者の関係性」（長谷川裕）だ。少しだけ紹介コメントしよう。

最新の国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センターとＮＨＫ放送文化研究所の調査データをもとにしながら、そしてリース

マン「孤独な群衆」の「伝統指向」「内部指向」「他人指向」という枠組みを使いながら、最近の子ども・若者の分析を展開している。

まず「子ども・若者の関係性の現状」について、「自分自身が標的になる場合もあるようないじめを日常的に伴いながら取り結ばれている友だち関係を、かれらは肯定的に受けとめているということになる。」Ｐ４４などと述べる。

そして、リースマンを参照しつつ、「伝統指向」と共同体的関係に代わるものとして、「近代社会は、まずは内部指向の社会的性格類型を普及させた。この類型の人々のもとでも、親密性の変容が進行し純粋な関係性が取り結ばれるようになっていった。ただ、この類型それ自体の特徴は、目標にむかって進み続けることを生き方の基軸とし具体的な他者との関わりには副次的な位置づけしか与えられないというものであった。」Ｐ４８と指摘する。

そして、

「上向きの成長・発展が終焉に至った段階で他人指向の社会的性格が広まるが、それと並行して、関係性＝純粋な関係性という社会関係が、人々の生にとってのその意味を高めるようになることを見た。まさに上向きの成長・発展の終焉後に当たる今日の日本の子ども・若者の社会的性格も、基本的に他人指向のそれであると考えられ、したがってかれらが自分たち同士の関係性を重要なものとして捉えるのも、上記のことの表れである。」Ｐ４９と述べる。

１９９０年頃から始まる社会の激変について、子ども・若者に焦点を当てた鋭い解明になっている。これは子ども・若者だけに限らない。高齢者も含めた年長者にも、この激変への対応が求められるが、いまだに「成長・発展」を求めて、対応できないでいる人がとても多い。本論文が示した解明を、特に高齢者にかかわってしたくなった。その際にはジェンダー視点が不可欠だろう。

論文はさらに次のような指摘を行う。

「今日の日本の子ども・若者の友だち関係においていじめが日常化している背景には、この他人指向型の対他者関係である関係性におけるポジショニングが、そこで日常的に繰り広げられているということがあると考えられる。」Ｐ４９

以上の指摘をしつつ、本論文が使用した調査が示す微妙な変化にも、次のように注目する。

「全体として、友だち関係や恋愛関係といった、本稿で「関係性」と呼んできたものの中核に当たる社会関係から、趣味や勉学など、楽しみのための、あるいは何らかの目的を達成する手段としての諸々の「活動」へと、関心の焦点がシフトしていることが読み取れる。」Ｐ５０

これには、私も注目したい。私が接する学生たちをはじめとする若者たちにも、こうした傾向が広がっているように思うので、今後さらに注視していきたい。

2014 年 05 月 27 日

「浅野誠エッセイシリーズ５政治経済社会」をホームページに掲載

２００７年まで作成していた旧ホームページ記事も含めて、このブログには、政治経済社会についての諸著作を読んでの学習ノート・読書ノートともいうべきものを掲載していた。

今回、２００７年から２０１３年に至るものを編集し、ホームページ「浅野誠・恵美子の世界」に掲載した。http://asaoki.jimdo.com

関心をお持ちの方はご覧ください。

掲載項目を並べておこう

ぶれ・ねじれ・ずれと首尾一貫　政治の世界だけでなく
社会と人口の変化　　停滞期―成熟人口　老衰期―高齢人口
発展幻想を取り払い、人口減少を前提にしたものへ　　赤川学論文
羽場久美子「グローバル時代のアジア地域統合」を読む
広井良典「創造的福祉社会」（２０１１年ちくま新書）を読む。
『日本の近現代史をどう見るか』（岩波新書２０１０年）を読む
ベック「ナショナリズムの超克」を読む
神野直彦「「分かち合い」の経済学」（岩波書店２０１０年）を読む
バウマン「コミュニティ」
西川潤「データブック人口」（岩波書店２００８年）を読む
国境にかかわる本を読んで、国境について考える
広井良典「コミュニティを問い直す」を読む
ヒッキィ・モハン編著『変容する参加型開発』を読む
ハーヴェイ「新自由主義」（２００７年作品社）を読む
クラウチ『ポスト・デモクラシー』（青灯社２００７年）を読む
岡田知弘ほか『国際化時代の地域経済学』（有斐閣２００７年）を読む
生源寺眞一『現代日本の農政改革』（東京大学出版会２００６年）に触れて、地域の農業を考える
社会構成主義　ガーゲン、野口裕二著書を読む
長谷川裕「後期モダン社会における若者の『自己の再帰的プロジェクト』－－沖縄に関する事例研究－－」（科学研究費報告書２００５年）を読む

2014 年 01 月 19 日

「浅野誠エッセイシリーズ１　フィンランドの教育と仕事」のホームページ掲載

２００３～２００７年に当時のホームページに、２００７年以降のブログに綴ってきたエッセイを、分野別に編集して、「エッセイシリーズ」として、ホームページ「浅野誠・浅野恵美子の世界」http://asaoki.jimdo.com　に掲載することにした。

予定としては、芸術、教育、大学、健康・身体・スポーツなどと続け、２０１４年いっぱいで一区切りをつけたい。

まず、その第一弾として「フィンランドの教育と仕事」を編集しおえたので、紹介したい。

私は、２０１０年９月と２０１１年９月の２回、通算で１ケ月余り、ヘルシンキを中心にフィンランドに滞在した。その際、多少の調査活動を行った。経済学研究者と一緒の旅であったが、多様な方々と出会い、インタビューをした。

また、滞在前後に多少の学習をした。

それらをもとに、数十本のエッセイを書いたが、それを編集したものだ。フィンランドの教育、とくに学校と仕事とのつながりに焦点を当てている。硬軟織り交ぜたもので、読みにくい点も多々あるが、お許しいただきたい。

目次を紹介しておこう

フィンランドの教育講演会
１）なぜ「底上げ」ができるか　特別支援教育
２）生徒・教師の共同創造型の授業
佐藤学・澤野由紀子・北村友人編「揺れる世界の学力マップ」を読む
１）産業主義・ポスト産業主義と学力
２）テスト　多文化主義
フィンランド予習
１）旅行計画
２）フィンランドと沖縄
３）産業・経済と教育
４）福祉
５）自然・建築・叙事詩など
６）生活風景
久しぶりのフィンランド予習
１）生活・個人尊重・つながり・墓
２）医療・徴兵・就職・勤務・観光

複式学級は有利だ
沖縄県議会文教厚生委員会フィンランド視察調査報告会
研究メモ
１）文献資料紹介
２）研究視野
３）文献紹介
４）フィンランドと日本における、若者の「学校―職業」と高等教育
「フィンランドの高等教育　ＥＳＤへの挑戦」を読む
１）本の概要
２）大学教授法の授業
３）ＥＳＤ教育の視野
４）持続可能とフィンランド高等教育
５）社会生活、日常生活における持続可能性
６）肯定心理学　ポジティブ心理学
７）変容的学習　研究ベースでの教員養成教育
フィンランド元文部大臣ヘイノネンさんの話　　経済と教育

１．インタビュー生活 『学校から仕事へ』
２．タテ社会でなくヨコ社会
３．競争と大学をめぐる日本との違い
４．競争と持続的発展
５．８０％近い大学進学率の背景
６．実にいろいろな資格
７．一般大学とポリテク
８．産業界の教育要求 個人の教育要求
９．公共サービスと産業界とを結ぶＮＰＯ
１０．教育文化省の高等教育担当者の話
１１．教職員組合でのインタビュー
１２．エンジニアの労働組合(ＵＩＬ)訪問
１３．エンジニアの労働組合(ＴＥＫ)訪問
１４．国家教育委員会の職業教育訓練担当者の話
１５．ポリテク学長会議でのインタビュー

調査追記
１．職業教育 大学
２．多様化と職業選択 職業資格 生涯学習
３．管理職業務 タテ型社会とヨコ型社会
４．エンジニア教育 労働組合と大学
５．スチューデント・カウンセラーなど
フィンランドのエンジニア教育 協力的知識創造
経済協力開発機構（ＯＥＣＤ）「PISA から見る、できる国・頑張る国」を読む
１．高成績 フィンランド 格差小 福祉 信頼
２．フィンランド教員の自由裁量の大きさと責任
３．フィンランドの学び 生徒自身が計画 協働重視

2013 年 12 月 24 日

（続）末本誠「沖縄のシマ社会への社会教育的アプローチ」を読む

前回書いたように、私は、地域おこしという角度からシマについて考えてきた。シマは地域おこしにうえで重要な位置を占める。

南城市でも、「町おこし課」を設置するなどの展開をし、シマを重要なものと位置づける動きは強い。そうした動きに、残念ながら社会教育が登場することは少ない。私がかかわる尚巴志活用マスタープラン作成も、社会教育と同じ教育委員会内の文化課が担当しているのだが、そこではエコミュージアムということが話題になっている。

そうした動向と社会教育がどうかかわるか、ということを考えていきたい。

関連していうと、本書第２章第２節で沖縄集落研究での様々な学的関心事例が紹介されているが、自治研究にも触れてほしかったと思う。

ところで、シマの１９世紀半ば以降の歴史をみると、いくつかの大きな変化がある。

その一つは、シマの生産単位として役割が、１９世紀から２０世紀へと移行する時期に、大きく低下することがある。いまでは、それは消滅に近い。それでも、サトウキビ収穫など農業活動の調整などをシマが担う例はある。また、シマおこしと言う場合に、この視点を重視する動きも出てこよう。

戦争期と戦後復興期は、シマのありように大きな衝撃がもたらされるが、その時期は、むしろそれまでのシマをバネにして、活動を展開するという色彩が強かったともいえる。

生産単位としてのシマ機能が低下したとはいえ、生活単位としてシマ機能は、戦後のかなりの時期まで継続していた。本書で新生活運動（生活の近代化）とか学事奨励とか保育とかで登場するものも、その例だろう。また、冠婚葬祭などをシマ単位で行うのもその例だろう。それなどは、いまでも濃厚に存在している。

そうした生活の共同的展開に大きな衝撃が訪れるのは、１９６０年代から７０年代にかけての経済成長期だろう。人々の生活におけるシマの占める位置の低下が進行する。

そして、近年の動向も、新たなシマの変容を作りだすのか、それともシマの解体傾向をさらに強めるのか、その逆に、シマの再創造の動きを作りだすのか、地域おこしとかかわって、注目すべき事態を生みだしている。たとえば、平成の大合併は、自治体のなかの単位としてのシマの位置・役割を高める要素をはらんでいる。また、ＵターンＩターンする人々が、シマの中で暮らす動きも目立っている。

このことは、本書が次に述べる通りである。

「このように今日「住む」という行為は、さまざまな形での移動（モビリティ）の可能性が前提となる社会において、ある場所に留まろうとしまたその範域を拡げようとする個人の意見や判断の結果として成り立っている。住民が他の場所ならざる「ある集落」に住むということは、単にその場所を居住地として選び取ったということだけではなく、自らがその場所で生活的な諸実践に参加し集合的な意味の発見や再構築の過程に、個人の経験を介して加わるという行為なのである。」Ｐ３４２

以上述べてきたシマの変遷のなかで、シマが『生き残ったのか、生き残らなかったのか』という問いも含めて、そのなかで社会教育、ないしは社会教育的なものが、どういう位置・役割をはたしていくのだろうか。

これらの点で、本書が提起するものを考えていきたい。

2013 年 12 月 22 日

末本誠「沖縄のシマ社会への社会教育的アプローチ」を読む

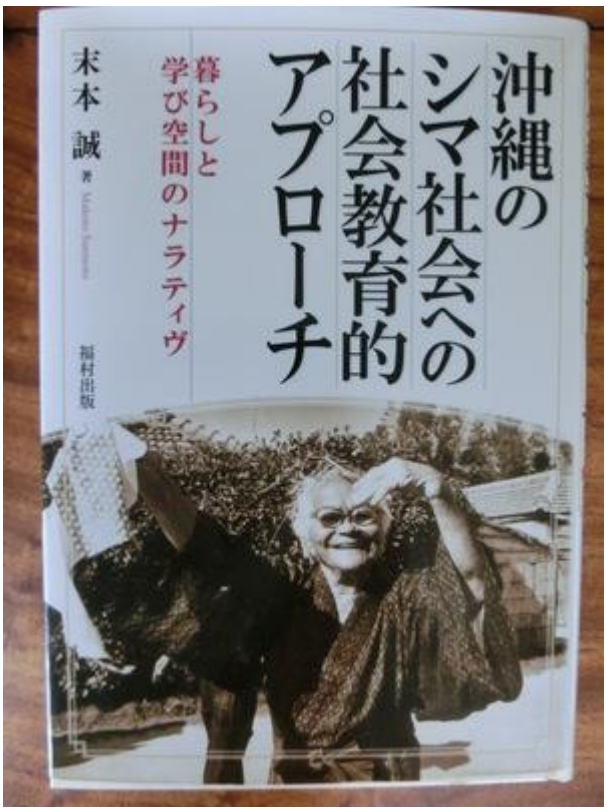
サブタイトルが「暮らしと空間のナラティヴ」で、福村出版から２０１３年に出版された本だ。

かなり以前から、沖縄のシマ（字、区、部落）が、公民館があることをはじめとして、社会教育的役割を果たしてきていることに注目して研究をすすめてきた社会教育関係者がいる。

その一人である松田武雄さんからは、いくつもの分厚い研究成果をいただいたことがあり、ブログでも長期連載で紹介コメントしたことがある。また、山城千秋さんの青年エイサーの取り組みを軸にする書籍も、このブログで長期にわたって取り上げてきた。

そうした社会教育研究者のお一人として末本さんがおられる。長年の研究成果を集約する本を最近出版され、私もそれを読んだ。字公民館、基地とかかわる地域課題、字誌づくり、沖縄戦体験記録、村踊り、個人の「人生の出来事」というように、シマに注目して収集した資料をもとにした、分厚い研究書だ。

この末本さんの提起をどう受け止めらいいか、本格的に論じるには、まだ時間がかかる。今回は、いくつか考えたい問題を提出するにとどめたい。



ところで、私自身は、そのシマに住んでいるので、日常的にシマとの関係のなかで、いろいろと生活し考えている。たとえば、共同清掃作業をはじめとするシマの日常生活、そして豊年祭などの行事にかかわる。現在は区の評議員もしている。ワッターシマの約２２０人のなかの１００人近くは名前がわかる。シマ生活に必須の屋号も７０戸のうちの半分近くはわかる。

私が住むシマは、本書に書かれている字誌や戦争体験記録はない。村踊りは、かつて棒（スーマチなど）や獅子舞いなどが盛んだったらしいが、今では御願の際に獅子舞い「もどき」をするくらいだ。だから、本書に描かれているようなシマの姿とはだいぶ異なる。といっても、４年に一度のジーハンタは、シマあげて（今は那覇などに住む出身者を含めて）の盛大な行事であり、字の会議は結構ある。御願なども役員を中心に途切れることなくなされている。大雨の後の補修、街灯維持、カーブミラーなどの設置、国道バイパス工事に伴う諸対処など、沢山のことがある。私も、そうしたことに積極的ではないにしても、関わる事がある。

加えて、私は、南城市の地域おこしに強い関心をもって、尚巴志活用マスタープラン作成委員会座長とか南城市文化センターシュガーホール運営審議会会長などもしている。市域一帯の地域行事にもかなり参加している。

こうして、地域に関わっている私だが、本書がいうような社会教育にかかわっているという意識は、これまでもっていなかった。私の意識の中では、もっぱら「地域おこし」ということでやってきた。また、当然、南城市には社会教育関係部署があり、社会教育関係者がいるはずだが、接点はなかった。

ということで、本書を契機に、改めて「シマと社会教育」をどう考えたらいいだろうか、ということを考えようというのが、現段階の私だ。

2013 年 09 月 28 日

模様替えした『生活指導研究』３０号を読む１

創刊以来２９号にわたって、出版社から刊行してきた日本生活指導学会研究誌『生活指導研究』が、３０号から学会の自主発刊となった。通常の学会のスタイルと同じであり、これまでの出版社発刊が、小規模学会としては例外的であったというべきだろう。小規模学会にとっては、出版社発刊は財政負担が厳しいという事情からだ。

手にとった新しい研究誌は、ごく通常の学会の研究誌と類似のものであり違和感はない。中味もこれまで同様に充実しており、「読ませる」ものだ。学会誌は通常、興味を抱かせる論文を数編足らず読む付き合いになりがちだが、『生活指導研究』は、通読してみようという気にさせることが多い。というのは、全体の６～８割が、学会大会での研究発表討論をもとに、編集委員会によって企画されたもので占められるからだ。当然、投稿論文もあるが、審査が厳しいという声もきかれるほど、毎回きちんとした論文が掲載されている。

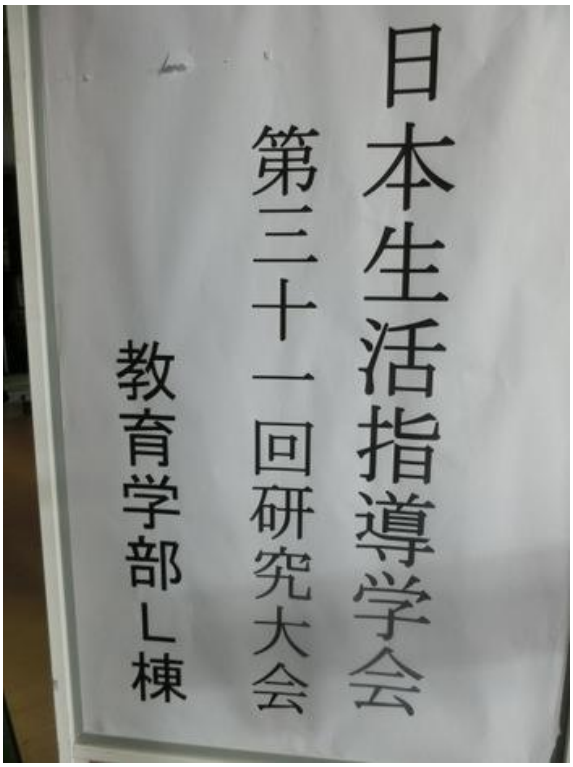
出版社を通さないので、学会員以外の購入希望の方は、学会事務局（現在愛知教育大学藤井研究室）に申し込むしかない。

今回の３０号は、４つの特集を中心に編集されているので、その特集テーマを紹介しておこう。

特集１　生活指導研究のこれまでとこれから
特集２　生活指導実践者の生き方と働き方
特集３　困難な課題を抱える子ども・若者・家族への支援
特集４　「生活指導事典」との応答―生活指導研究の行方と展望

他は、投稿論文と書評・図書紹介で構成されている。

私がとくに興味深く読んだのは、「特集２　生活指導実践者の生き方と働き方」の諸論文だ。現在、対人援助に関わる生活指導実践者のなかで、とくに中堅ベテランといわれる４０代５０代に方々のなかで、自身を犠牲にするほどの「働き過ぎ」が蔓延しており、実際、危機的状況のなかに置かれている人が多いからだ。



2013 年 09 月 13 日

生活指導学会大会　大学における生活指導

７―８日に、和歌山大学で開催された日本生活指導学会大会に参加した。長く務めてきた学会役員も今回をもって終了し、ひとまずほっとしている。

大会では、いくつも興味ある点があった。たとえば、全体会での問題提起と討論。テーマとはやや異なる地域おこしという視点から私は興味をもった。とくに、医療・福祉・弱者という視点からの地域おこしがいくつか話題になった点だ。生活指導学会が、１９８０

年代後半より地域生活指導運動として検討してきた課題が、新しい地平で論議されるようになった印象をもった。

私が、コメンテイターとして関わった分科会では、若手で大学教員になって日の浅い方々による「大学における生活指導学会実践」の提起を、興味深く感じた。２０００年以前の大学における生活指導実践とは異なる形で、とくに限られた教員の個人的アプローチではなくて、大学・学部・学科などの集団的取り組みとして展開されるありようが話題にのぼってきた。

そこで、お二人の提案に対する私のコメントを転載しておこう。

：：：

日本生活指導学会３１回大会課題研究Ｃ　「青年期生活指導実践—他者と共に生きることの学び」

コメンテイター　浅野誠

１）本分科会は、「生活指導実践」にかかわって設定されている。大学・学生がどうなっているか、ということも踏まえつつ、大学における生活指導がどうなっているか、に焦点を当てる必要がある。

２）大学における「生活指導実践」史は、事実としてはかなり以前から、意識的なものとしては１９８０年前後、ないしは１９７０年代に遡ることができる。なお、そのころより、「相談室」を設置し、個別相談としての実践を展開する事例は多い。ただし、生活指導としてよりも心理相談としての自己規定であったが。

私の場合、１９７０年代から学生集団を形成し学生間の関係性構築を促進することを軸にする生活指導実践を模索してきた。論文・報告・単行本などでの公開は１９７０年代末から１９８０年代前半にかけて行った。その過程で、全国各地でそうした実践の展開例がかなり多いことを知った。

次には、１９８０年代末から９０年代初めにかけての、新たな実践展開がある。その次には、１９９０年代末から２０００年代初頭にかけての新たな展開がある。

今回の問題提起は、こうした歴史性を、どのように踏まえ、今日の大学における生活指導実践をいかに分析評価するのか。

３）主として個人による先駆的実践と言う形と、大学・学部・学科という組織において、チームとして「制度化」して取り組んでいる形。双方とも、歴史は長い。すでに１９７０年代から展開されている。

４）「上位大学」「下位大学」「短大」「専門学校」という順序をつけての把握の「有効性」と疑問。

疑問の主要点は、「生活指導実践」としての把握なのかどうか。「上位大学」が実践としてはもっとも遅れている。そして、それらの大学院において、実質的に大学教員養成機能を果たしているという矛盾。（中略）

５）「大学教員は、基本的に研究者になるために・・・」の記述は、生活指導実践を意図的に展開している大学教職員の何割なのか。生活指導実践を行う人には、職員、研究者を基本にアイデンティティをもっているとは言い切れない人、「全国区の労働市場で移動」する人ではない人がかなり存在し、そういう方々に実践が支えられている事例はかなり多い。また、「基本的に研究者になるために・・・」と言う人が、「ひとかわむいて」生活指導実践者になることが多い。また、あくまでも研究的姿勢を持ちつつ、研究創造的に生活指導実践に向かう人も多い。こうした教師論を展開する必要がある。大学教職員が、実践家として成長するにはどうしたらよいか。

大学の教育実践を展開する構えが希薄だと言われるが、１９９５年ごろを境に大きな変化。教育業績・面接における

模擬授業などが一つの契機。授業を中心にして大学教育実践についてのある程度の知識と実践をもって大学教員になる人が劇的増加（それ以前の１％以下とは大違い）。（中略）

６）実践的提起をどうするか。焦点として、学生集団を発展させることは、１９７０年代以来変わってはいない。学生が所属する学科などの組織、サークル・部活、さらには授業を学生集団として展開していくことなど、いろいろなアプローチが歴史的になされてきた。これらをいかに分析し、今後の課題と展望を提起するのか。

少人数関係に閉じこもりがちな学生相互の関係を広く深く築く。学生集団を組織し、それを高める。ゼミ集団の受講生による自治的性格を高める。講義での受講生集団を組織する。学生の将来構想に意識的に挑む。（大学授業での私の「人生創造」にかかわる実践　９０年代末から今日まで。）

授業において、毎年担当する同一科目であっても、それまでの経験が生きる比率は、それほど高くない。授業最初の３回は、かみ合わせをはかり、学生たちが能動的に授業にかかわってくるようにするプロセスが必要。とくに学生集団形成に力を注ぐことが重要。私の場合、学生全員（５０～６０名）が、討論・共同作業にかかわり、全体の前で発言するようになり、半数ぐらいの学生相互間につながりを築くことを目安にしている。最近の私は、５大学・専門学校で、おのおの全く異なる科目を担当して実践しているが、上記の過程が不可欠だ。

７）（中略）所属大学以外の同世代の若者集団とのかかわりをいかに作りだすか。地域青年会やアルバイト集団。

８）教員の過剰労働への対処

基本は、学生間の相互教育力、集団教育力を高める事で対処。学生集団のなかに歴史物語を作ること。

教員の世話焼き過ぎを警戒

参照）　私の、大学における生活指導関連著書・論文など

１９８１　「大学教育実践論の構想―その原理と教育主体の確立を中心にして」日本教育方法学会『教育方法学研究』第６巻

１９８３（ａ）　「大学における教育実践の改善と大学教師」日本科学者会議教育問題委員会・原正敏・浅野誠編『大学における教育実践』第１巻「大学教師の仕事」

１９８３（ｂ）　「大学における教育実践の方法的検討」日本科学者会議教育問題委員会・原正敏・浅野誠編『大学における教育実践』第２巻「大学教育の工夫と方法」

１９８３（ｃ）　「大学教師奮戦記」日本科学者会議教育問題委員会・原正敏・浅野誠編『大学における教育実践』第３巻「実践的大学教育論」

１９８６（ａ）　「教師教育における理論と実践」『教師教育』５号

１９８６（ｂ）　「大学教育実践の教育学検討をめぐって」『教育学研究』５３巻３号

１９９３（ａ）　「大学改革と大学教育実践」東海高等教育研究所『大学と教育』第７号

１９９３（ｂ）　「研究的実践者を育てるー私の教師教育実践」日本教師教育学会年報第２号

１９９４　「大学の授業を変える１６章」大月書店

１９９６　「大学「生き残り」と大学教育実践の創造」『教育』１２月号

１９９８　「新バージョン「大学の授業を変える」への模索」「大学教育学会誌」２０巻２号

２００２　「授業のワザ一挙公開―大学生き残りを突破する授業づくり」大月書店

2013 年 08 月 14 日

分厚い本を読む

たくさんの授業が終わって、時間のゆとりができ、分厚い本も読んでいる。二つ紹介しよう。

１）『琉球大学　人の移動と２１世紀のグローバル社会Ⅷ　人の移動、融合、変容の人類史』（彩流社２０１３年）

４００ページ４０００円の本だ。このシリーズはいずれも興味をそそるものだが、いずれも高価で分厚いので、この一冊だけに目を通した。中国・台湾、ハワイ・アメリカ、タイ・ラオス、太平洋・島嶼、移民などと沖縄とをからめた調査を元にした論考で、私の視野を広げてくれるものだ。

個々に推進された諸研究を、相互に関わらせて、新たな広がりと深化を追求するものだ。大学での研究が個々の分野のなかで個別に推進され、大学人の協同作業として深化発展することが少なかったこれまでの状況を越えて、「琉球大学は興味津々の研究をする大学だ」と、これまでより以上に評価されることを期待したい。

そして、こうした作業が、さらに深化して、新たな問題提起、諸問題の新たなレベルでの質的探求へと発展することを期待したい。

２）アリス・ロバーツ『人類２０万年　遥かなる旅路』（文藝春秋２０１３年）

これまた５００ページの分厚いものだが、１９００円とアクセスしやすい。イギリス BBC のドキュメンタリー番組をもとにしたもので、NHK でも放映されたらしい。

こうした類に、私は以前から興味をもってきた。現生人類が、アフリカを出て、世界各地に広がる動きを、世界各地での取材を紹介したものだ。

知らなかった事が一杯だ。沖縄の山下原人の話も登場する。これまでの考古学的研究に加えて遺伝学研究に象徴される急速な前進が、多くの知見を加えている。あと１０年もすれば、多様な仮説間で議論されていることの多くに決着がつき、これらの時期の全貌がかなり鮮明になるだろう。

これらの本の読了にともない、贈呈された何冊かを読むことと、沖縄音楽教育史関連の読書に、しばしは集中することになろう。